

戯曲

# Global Baby Factory

グローバル・ベイビー・ファクトリー

2014年3月20日版

作 鈴木 アツト

劇団印象—indian elephant—

上演時間 約105分

登場人物

- 河野砂子
- 河野礁子（砂子の妹）
- 砂子の母親
- 砂子の父親
- 芦田潤一
- 砦那智
- 柳生（カメラマン）
- 権藤宣子（コーディネーター）
- ナジマ・ヴァグラ
- ルビナ・ラクダワラ
- デサイ
- インディラ

- スマン・ヴォーラ
- アニラ・マクヴァナ
- マルパニ
- アヌーパ
  
- クジャク
- スキヤキ
- オニギリ
- ミソスープ
- チクワハンペン
  
- 実況の男
- エステティシャン
- 20代前半の河野砂子A
- 20代後半の河野砂子B
- 産婦人科医
- 親戚のおじさん・おばさん合唱団

註 本作品の無断上演を禁じます。上演をご希望の場合は、

info@innzou.com 宛にお問い合わせください。

第1場 夢の中のスイミングプール

俳優たちがぞろぞろと出てくる。それぞれ白い衣装を身にまとい、思い思いに手首を捻ったり、足首を回したり、ストレッチ。衣装のお尻には細長い尻尾のようなもの。その尻尾を手でグルグル回したりする者もいる。突然、ピーっというホィッスルの音。実況の男、登場。

実況「第一のコース！スキヤキ。スキヤキ」

黄色い歓声。スキヤキと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「第二のコース！オニギリ。オニギリ」

歓声。オニギリと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「第三のコース！ミソスープ。ミソスープ」

歓声。ミソスープと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「第四のコース！チクワハンペン。チクワハンペン」

歓声。チクワハンペンと呼ばれた俳優は、手を挙げて応える。

実況「位置について、」

スキヤキたち、水泳のスタートの格好をする。

実況「（喘ぐ）オオオ、、オオオ、、オオッ！」

実況の男、突然、射精の瞬間の表情と声。オオッ！という最後の瞬間に合わせて、スキヤキたちがプールに飛び込むように前方に飛び出し泳ぎ始める。

それは受精を賭けた水泳レース。

精子たちが数多の障害を乗り越えていくと、その先に卵子（クジャク）が見えてくる。スキヤキが一番先に卵子（クジャク）に飛び込むと、インド人の妊婦が二人、現れる。精子たちと卵子、実況の男、退場。

## 第2場 あるインドの病院

ナジマ「ついに頭がおかしくなっちゃったかも、私」

ルビナ「え？なんで？」

ナジマ「だって毎晩同じ夢を見る。それも変な夢。精子の夢」

ルビナ「精子の夢？」

ナジマ「変な名前のついた精子の夢」

ルビナ「変な名前？」

ナジマ「たしかスキヤキ？そう、スキヤキって名前だった」

ルビナ「スキヤキ？」

ナジマ「知ってるの？」

ルビナ「それ、ジャーパーンの食べ物だよ！」

ナジマ「ジャーパーンの？」

ルビナ「そういえば、、あんなのはジャーパーニーだったね」

ナジマ「、、」

ルビナ「だからじゃない？その夢」

ナジマとルビナ、退場。

### 第3場 日本・スポーツジム

工業社会のイメージで、スポーツジムのマシンの動きがアンサンブルたちの身体表現で表される。砂子と那智がジムのスポーツ器具でエクササイズしている。鏡を見る那智。少しお腹が出ている。

砂子「どうしたの？」

那智「見ないでよ」

砂子「別に見てないよ」

那智「嘘よ。見たでしょ？お腹」

砂子「鬼でないから」

那智「くそ。妊婦じゃないのに妊婦みたい」

砂子「気になるなら痩せれば？」

那智「これでも痩せようとしてるの」

砂子「へえ、そう」

那智「いいよね砂子は。大学時代から変わらないから。とても今年

で37には見えない」

砂子「そんなことないよ」

那智「実際どれくらいお金かけてるわけ？」

砂子「何が？」

那智「そのスタイルとかお肌を保つために」

砂子「かけてないわよ」

那智「またまた」

砂子「かけてないわよ」

那智「嘘だ。絶対嘘だ」

砂子「本当よ」

那智「(砂子の頬をさわる) だってこんなにプリンプリンしてる」

砂子「何もしないのがいいのよ」

那智「はい？」

砂子「顔はさっと洗ってさっさと眠る。それが一番」

那智「それだけで？」

砂子「そう。それだけ」

那智「くそ。羨ましい」

砂子「(観客に) そんなことはもちろん嘘で」

エステティシヤンの声「勝てませんわ、河野さんには」

#### 第4場 日本・エステティックサロン

エステティシヤン、登場。那智、退場。砂子、エステティッ

クサロンでマツサーズを受けている格好になる。

砂子「そう？」

エステティシヤン「おいくつでしたっけ？」

砂子「知ってて聞いてない？今年で37です」

エステティシヤン「嘘だ。全然見えませんよ」

砂子「いやいや、いろいろ衰えてるから」

エステティシヤン「お仕事も順調なんですよ？お住まい恵比寿でし

たっけ？もう何でも持っていらっしやる」

砂子「そんなことないの」

エステティシヤン「河野さんみたいな常連さんを持って、私、本当に幸せ。ここだけの話、エステのし甲斐のない方もいらっしやい

ますから。絶対言えませんが。言えませんが、焼け石に水な方？  
むしろ豚に真珠？あ、言っちゃった。それに比べ河野さんは私が  
頑張れば頑張るほどどんどん美しくなる。こんな喜びはありません  
ん」

砂子「ありがとう」

エステティシャン「ところでこのかたつむりのエキスを使った新し  
いクリーム試してみませんか？またまた若返りますよ」

砂子「アンチエイジングの魔法は高くつく。でも私は若さを買うこ  
とができる。この世にはお金で買えないものはないのだ」  
礁子の声「ぼんじりも食べていい？」

## 第5場 焼き鳥屋

礁子、登場。 エステティシャン、退場。

砂子「どうぞ」

礁子「いただきます、（食べながら）こつやって串をはずさないで

焼き鳥食べるのいつ以来だろ？」

砂子「ちよっと大袈裟じゃない？」

礁子「これが大袈裟じゃないんだなあ」

砂子「こんなんでご自分でくれるならいつでも奢るわよ」

礁子「いいなあ、お姉ちゃんは」

砂子「え？」

礁子「そんなに収入があつて。自由に生きられて」

砂子「だって働いているもの。自分の時間を売って」

礁子「お姉ちゃんは時給にしたら5千円ぐらい？」

砂子「もったかな？」

礁子「売り甲斐あるよね？私なんて時給930円なのに」

砂子「930円？何フィリピン人？四捨五入しても千円いかない」  
礁子「舞台のために休める仕事ってなるとそういう風になっちゃうのよ」

砂子「何よ、あんたこそ自由に生きてるじゃない。いい大人が趣味のために一週間も二週間も働かないんだから」

礁子「舞台は趣味じゃないです。私の本業です」

砂子「食えてないんだからただの趣味よ。いい？私、稼いでますけどね、あんたと違って自分の自由だけ考えてるわけじゃないの。

月に一回、恵まれないアフリカの子供たちに募金してるんだから」

礁子「お、素晴らしい偽善」

砂子「悔しかったらやってみなさいよ。素晴らしい偽善」

礁子「…、ねえ、お姉ちゃん」

砂子「何？」

礁子「一生のお願い」

砂子「だから何よ？」

礁子「…、私にも募金して」

砂子「は？」

礁子「お金貸して」

砂子「…、」

礁子「私も思うのよ。自由ってお金で買うもんだよなあって。自分のも、他人のも…、投資してくれない？私に。この借りはいつか

きつと返すから。お願い」

砂子「舞台やって借金でも作ったの？」

礁子「まあ、そんなところ」

砂子「いつまで続けるのよ？そんな未来のないこと」

礁子「いいの。やっていればいつか道が拓けるんだから」

礁子、退場。



## 第6場 砂子の部屋

砂子「礁子のいつかはいつ来るのだろう？あの子はまだ想像もしていない。10年先の自分の姿を」

砂子、鏡を見る。鏡の向こうに20代前半の砂子Aが現れる。  
さらに、砂子の背後に20代後半の砂子Bも現れる。

砂子「鏡を見ても1年前と今日の違いはわからない」  
砂子B「私はいつものように下地を塗る。私はいつものようにファンデーションを塗る。いつものようにアイシャドウをつける。いつものように頬紅をつけ、いつものように眉毛を描き、いつものように口紅をつけ、いつものようにいつものようにいつものようにいつものように」

9

砂子と砂子Aは向かい合って化粧をするが、砂子Aは、砂子から少しずつ離れていく。

砂子「でも何も変わらないようで何かは変わっている。1年ずつ比べても差はないのに10年前の私と今の自分では孔雀と駝鳥ぐらいい違っているのだ」  
権藤宣子の声「私共マザードリームが提供したいのは新しい選択肢です」

## 第7場 マザードリームの説明会

権藤宣子、登場。砂子A、Bは退場。

権藤宣子「30年前に比べ、35歳から44歳の間に妊娠する女性は、なんと2倍近くに増えました。高いレベルの教育を受けた女性が、その能力に応じた社会的地位を得るには、出産を後回しにしなければなりません。しかし女性の身体には時間の制限があります。自然の摂理で生殖能力は30代で少しずつ低下していくのです。そこで私共はそういった女性たちのために、画期的な方法を編み出しました」

権藤宣子の言葉に合わせて、砂子とアンサンブルが、毎日の生活を、儀式のようなムーブメントで表現していく。

権藤宣子「日々の生活は少しだけしか変わりません。朝起きて、コーヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、腹部にホルモンを注射する。朝起きて、コーヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、腹部にホルモンを注射する。これを14日間繰り返すだけです。皆さんの卵巣から採取した卵子は、皆さんが子供を本当に作る時まで冷凍保存して大切に保管いたします。何かご質問はございますか？」

砂子をはじめ、何人かがハイッと手を挙げる。

権藤宣子「では、その方、どうぞ」

砂子「卵子はいくつの時に冷凍保存するのがいいのでしょうか？」

権藤宣子「卵巣における卵子の生産能力は年齢と密接な相関関係にあります。27歳をピークすると40歳でその95%が失われます。つまり年齢が若ければ若いほどベストです。今すぐあなたの卵を保存しましょう」

権藤宣子、卵を取り出して砂子に手渡し、退場。

砂子「百万円で冷凍保存した卵子を本当に使うつもりはなかった。私はまだ自然妊娠をあきらめてはいない。でも王子様は今すぐ現れるわけじゃない。一年後？二年後？三年後？眠り姫が王子様を待つには魔法の魔法が必要なのだ」

箸で、生玉子をかきまぜる音。砂子の家族たちが出てくる。  
父親、母親、礁子が趣味の良いダイニングテーブルですきやきを食べている。

## 第8場 河野家の食卓

母親「食べないの？」

砂子「え？」

母親「食べなさいよ。好きでしょ？スキヤキ」

砂子「うん」

礁子「はい、割ってあげる」

砂子「え？あ？ありがとう」

礁子、砂子が手に持っていた卵を割って、器に移す。砂子、礁子からとかれた生玉子の入った器を受け取る。

母親「はい、お父さん」

父親「うん」

父親は、母親からとかれた生玉子の入った器を受け取る。礁

子と母親、自分の分の生玉子をかきませる。その音が響く。

礁子「この卵不自然？オレンジ色すぎない？」

母親「実はそれ高いやつなのよ。国産の高級品」

礁子「え？そんなの？いくら？」

母親「一個百万円！」

砂子「え？」

母親「嘘。百円」

礁子「そういえば、こころなしか弾力がある気がする。さすが高い

卵は違うね。いただきます！」

父親「ずいぶん高い卵買ったんだね？」

母親「ご近所の村上さんにいただいたの。どうしたの？砂子も食べ

なさいよ」

砂子「うん、（食べる）美味しい！」

砂子、食べ始めると、食べ方が段々と豪快になっていく。

母親「好きははずよ。あんたがお腹の中にいた時はもうスキヤキが

食べたくなって食べたくなってしょうがなかったんだから」

礁子「それでこんな肉食系の女になっちゃったんだね」

砂子「誰が肉食系よ？」

礁子「ほら」

父親「村上さんはいつもこんな高い卵を食べてるのかな？」

母親「違うわよ。お祝いにもらったんですって」

父親「お祝い？」

母親「お嬢さんが結婚したんですって」

父親「おいくつのお嬢さん？」

母親「さあ」

父親「さあって」

母親「そこまで仲良くないもの。村上さんとは」

父親「仲良くないのにもらうなよ。高い卵」

母親「みんなに言いたかったんでしょ？おめでたいことだから」

父親「だったら聞いときなさい。いくつのお嬢さんが誰と結婚したのか。そんなに若いお嬢さんじゃなかったよな？」

母親「砂子と同じぐらいじゃない」

父親「村上さんもやっと肩の荷が下りたわけだ」

母親「砂子、お父さんがまわりくどくあんたの結婚はまだかかって聞  
いてるわよ？」

父親「どうなんだ？結婚？」

砂子「…、する気もないし相手もない」

礁子「する気はあるんでしょ？」

砂子「ないわよ」

父親「お見合いでもしてみたらどうだ？」

砂子「私がお見合い？」

礁子「私は彼氏いるもん」

砂子「いい。いい。私、そついうの無理だから」

母親「なんで無理なの？」

砂子「無理でしょう？お見合いなんかダサイ男しかいなくない？」

母親「何その言い方？」

砂子「え？だってそうでしょ？」

母親「砂子、わかってる？タイムリミットがあるのは女の方なんだ  
からね」

父親「母さん、ストレートに言いきりすぎだよ。まわりくどく」

砂子「何？そのプレッシャー？え？孫が欲しいの？」

母親「欲しいわ。悪い？」

父親「まわりくどくね」

砂子「あ、でもね、今は仕事もある」

母親「そんなこと言ってる間に上がっちゃったらどうするの？」

父親「うぎゃ」

砂子「やめてよ。露骨な言い方」

母親「露骨に言わなかったら伝わらないじゃない。ああ早く孫の顔が見たい！」

砂子「卵で産めたらねえ」

母親「はい？」

砂子「思ったことない？卵で産めればって。仕事に行ってる時は蒲団の中にとまっておいて夜寝る時だけ温めればいいの」

母親「コンビニのお弁当じゃないのよ。そんな簡単じゃないの。いい？赤ちゃんがお腹にできたばかりの女はまだ母親じゃないの。

ただの娘っ子よ」

父親「母さん落ち着いて」

砂子「何その言い方？農家？」

父親「砂子も」

母親「十月十日、一心同体で一緒に過すことが大事なの。その時間が娘っ子を母親へと成長させるのよ。わかる？女は子供を産ん

で一人前」

礁子「古臭っ」

砂子「時代は変わったの。みんながそんな風に考えてないから、出産率が劇的に下がってるんでしょが」

母親「贅沢なのよ。経済力をつけた女が自分のことをお姫様だっと思ひ込んで、みんなが王子様を待ってる。どうせあんたもそうなら

んでしょ？」

砂子「いやいや別に待ってないから」

母親「言っとくけどあんたはシンデレラじゃないからね」

父親「まわりくどくど！」

母親「白雪姫でも眠り姫でもない。ただの適齢期過ぎたオバサン。いい？シンデレラに小皺ある？白雪姫にカラスの足跡ある？あいつら10代だから。少なくとも20代ね。30はいってないのよ、わかってる？」

礁子「収入はお姫様クラスなのにね」

母親「お姫様が自分でガボガボ稼いだらキャラ崩壊なの！」

父親「お見合いでもしてみたらどうだ？」

潤一の声「お仕事は何を？」

潤一、登場。父親、母親、礁子、退場。

第9場 お見合いパーティー

砂子「ニコラでマーケティングをやっています」

潤一「ニコラってあのニコラですか？」

砂子「ご存知ですか？」

潤一「もちろんです。恥ずかしながら買ったことはいんですけど」

砂子「お仕事は何を？」

潤一「営業です」

砂子「どんな会社なんですか？」

潤一「器を作ってる会社です」

砂子「え？器？」

潤一「はい。器。容器。容れるもの。コンビニのお弁当のケースとかプリンのカップとかあんぱんを包んでるビニールの袋とかそういうのを全般的に扱ってる会社です」

砂子「大事ですよ。器」

潤一「大事だと思ってないでしょ？」

砂子「思ってますよ」

潤一「地味な会社です。わかってますから」  
砂子「そんなことないですよ。器。ほら器があるから物運べるわけじゃないですか。器があるから中身を守るわけだし」  
潤一「でも地味でしょ？ニコラに比べれば」  
砂子「それは、まあ、」  
潤一「ははは、そうなんです。でも自分は嫌いじゃないんです。今の仕事」

突然、砂子AとBが現れて、

砂子B「決めちゃえば？」  
砂子「え？」  
砂子A「地味じゃない？」  
砂子B「仕事がでしょ？でも身体はそうでもないと思うよ」  
砂子A「え？そう？」  
砂子B「そうよ。脱がしてみる？」  
砂子「ちよつとやめなさいよ」  
砂子B「何よ、見たいくせに」  
潤一「どうしたんですか？」  
砂子「いや、あのう、「趣味は？」  
潤一「え？趣味ですか？」  
砂子「はい」  
潤一「水泳を少々」

砂子B、潤一の服を脱がす。と、潤一、競泳用水着を着ている。

砂子「水泳？」



潤一「はい、高校時代水泳部で」

砂子A「聞いた？」

砂子B「見た？」

砂子「そうなんですか、奇遇ですね。私も水泳部だったんです」

潤一「競技は何を？」

砂子「背泳ぎでした」

潤一「僕は自由形でした」

実況「第一のコース！スキヤキ。スキヤキ」

突然、実況の音がする。すると、スキヤキが出てきて、歓声に手を挙げて応える。

潤一「これでもインターハイに出場したんです」

砂子「今でも泳いでるんですか？」

実況「第二のコース！オニギリ。オニギリ」

オニギリが出てきて、歓声に手を挙げて応える。

潤一「週に一度ジムで」

砂子「そうなんですか？私もジムに通ってるんです」

実況「第三のコース！ミソスープ。ミソスープ」

ミソスープが出てきて、歓声に手を挙げて応える。

潤一「奇遇ですね？」

砂子「お忙しくないんですか？」

実況「第四のコース！チクワハンペン。チクワハンペン」

チクワハンペンが出てきて、歓声に手を挙げて応える。

潤一「忙しいですけど、何をするにも体力がないと始まりませんか

ら」

砂子「そうですよね。体力大事ですよね」

潤一「あもう」

砂子「はい」

実況「位置について、、」

スキヤキたち、水泳のスタートの格好をする。

潤一「もしよかったらもう一度会ってもらえませんか？」

実況（「喘ぐ」）オオオ、、オオオ、、オオツ！

スキヤキたち、プールの中に飛び込むように前方に飛び出し、泳ぎ始める。スキヤキたちはいつの間にか消えて、潤一と砂子のセックスがダンスで表現される、、ことが終わって。

## 第10場 ホテル

潤一「きれいな足首だね」

砂子「え？」

潤一「キュッと引き締まったアキレス腱。たまにいるんだよね、象みたいにあの腱のところにくぼみが全くない女の子が。でも君のは全然違う。綺麗だ。かかとかから細い筋がくつきりと浮き上がってる」

砂子「あなた、足フェチなの？」

潤一「ねえ、さわってもいい？」

砂子「さわるだけ？」

潤一「少しだから。ダメ？」

砂子「私、自分の足には自信があるの」

潤一「え？」

砂子「足首だけじゃなくて足の甲も見て。ねえ、きれいじゃない？

指も。爪の先も」

潤一「、、、」

砂子「キスして。足の甲に」

潤一、砂子の足を持ち上げようとしますが、

砂子「違う。私の足は持ち上げない。あなたの唇を私の足に持って

いって」

潤一、土下座のような仕草になって、砂子の足にキスをする。

19

砂子「最高ね、この眺め」

潤一「ねえ、これから毎日こうやってキスしてもいい？」

砂子「こうして私は結婚した。彼は約束どおり、毎日私の足にキスをした。日々の生活は少しだけしか変わらない。朝起きて、コー

ヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、足の甲にキスされる。朝起きて、コーヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、足の甲にキスされる」

ホルモンを注射するシーンの儀式のようなムーブメントが繰り返される。しかし今回は、一組の男女の日常が表現される。

砂子「彼にキスされる度に、私の足はどんどん溶けていった。まる

で足なんかないかのように私は羽ばたいた」

那智の声「幸せそうね」

砂子「そう?」

砂子、振り返ると、そこに那智がいる。潤一、退場。

## 第11場 那智の部屋

那智「羽根が見えるよ。羨ましい。いいねえ、そうやって飛び回れる人は」

砂子「あんただって飛び回ってるじゃない。それこそ世界中」

那智「おかげで結婚もできない」

砂子「何?結婚したいの?」

那智「裏切り者!」

砂子「え?」

那智「結婚なんかしなくてもいいよねって一緒に言ってたのに」

砂子「言ってたっけ?」

那智「くそ」

砂子「ごめんって」

那智「いくらでもできた時はしなくてもいいって思ってたけど、歳取るとどんどん、何年前はさ、親戚のおじさんおばさんが」

白のフォーマルなシャツに黒いパンツかスカートを穿き、顔は白塗りの、親戚のおじさんおばさん合唱団、登場。ヘンデルのメサイア・ハレルヤコーラス風に歌う。

おじさん1・2、おばさん1・2「結婚♪結婚♪しないの?しないの?しないのか♪結婚♪結婚♪しないの?しないの?しない

「のから」

那智「って大合唱。なのに、最近誰からも何も言われなくなった」  
おじさん１・２、おばさん１・２「シヨパンの葬送行進曲で、囁くように）あの子結婚できないの〜あの子結婚できないの〜」  
きないの〜」

那智「もう私には仕事しなくなっちゃった」

砂子「今は何を撮ってるの？」

那智「内緒」

砂子「何よ。いつも教えてくれるじゃん」

那智「実はまだ企画書の段階なの。でもこの企画は絶対通るんだな」

砂子「自信あるんだ？」

那智「まあね」

砂子「わかりやすい幸せはわかりやすい幸せで大変だよ。私は、結婚しないのかって言われなくなったら、今度」

おじさん１・２、おばさん１・２、たまひよテーマソングを

歌う。たまひよテーマソングの合間に、

おじさん１・２、おばさん１・２（低い声で）子供はいつ〜子供はいつ〜」

という合いの手を挟みながら、合唱団は、砂子と砂子を居場所を奪うかのように、追い詰めていく。

那智「ねえ、子供のいない幸せってあると思う？」

砂子「いくらでもあるはずなのよ。子供がいなきゃ幸せになれないなんて幻想よ」

砂子、ふいに、お腹が痛む。合唱団、退場。

那智「どうしたの？」

砂子「いや、ちょっと」

那智「大丈夫？」

砂子「大丈夫。大丈夫」

那智「ねえ、砂子、まさか」

砂子「え？」

那智「おめでた？」

砂子「いやいやいや早過ぎるでしょ？」

那智「私に遠慮しないでいいんだからね」

砂子「いやいやいやないから」

那智「してないわけ？」

砂子「いやそりゃあしてますけど、新婚だし」

那智「じゃあ」

砂子「わかったわかった。明日病院行ってみるよ」

潤一の声「砂子」

潤一、登場。那智、退場。

第12場 潤一と砂子の新居（ベランダ）

砂子「おかえり」

潤一「遅くなってごめんね」

砂子「大丈夫。私も那智と会って那智の部屋で話し込んだかったから」

潤一「那智さん？」

砂子「映像の制作会社に勤めてる大学の同期」

潤一「え？ドキュメンタリー撮ってるっていう？」

砂子「そうそう」

潤一「何話したの？」

砂子「恋愛とか結婚の話。那智、結婚したいんだって」

潤一「那智さんっていくつ？」

砂子「私と同じ。37」

潤一「したいなら、すればいいのにな」

砂子「そんな簡単にできないでしょ？相手がいることなんだから」

潤一「俺達はできたじゃん」

砂子「ふふふ」

潤一と砂子、じやれ合い、ふいに時間が止まったかのように、  
見つめ合う。

潤一「ねえ、しよう」

砂子「明日、大事なプレゼンがあるって言ってなかった？」

潤一「だからこそだよ」

砂子「意味わかんない」

潤一「プレゼンに集中するためにね」

砂子「今日はダメ。なんかお腹が痛いのよ」

潤一「え？大丈夫？」

砂子「なんともないと思うけど一応明日病院行ってくる。だから明

日の夜は、、、」

潤一「へへへ」

砂子「プレゼン頑張って」

潤一「了解！、、、ん？砂子？」

砂子「何？」

潤一「お腹が痛いって、もしかして？」

砂子「ふふふ」

潤「ホント？」

砂子「まだわかんないから」

潤「ねえ、男の子かな？女の子かな？」

砂子「気が早すぎ」

潤「なんか超やる気出てきた。やばいな明日のプレゼン。俺頑張りすぎちゃうな」

砂子「頑張って、お父さん」

潤「え？もう一回言って」

砂子「ん？」

潤「だからもう一回」

砂子「お父さん！」

潤「はい！」

産婦人科医の声「芦田砂子さん」

砂子「はい」

第13場 産婦人科のクリニックとオフィスのプレゼン風景

舞台上には二つの空間。砂子がいる産婦人科のクリニックと

潤がいるオフィスのプレゼン風景。

産婦人科医「どうぞお座りください」

砂子、座る。

潤「ではプレゼンテーションを始めさせていただきます」

産婦人科医「検査の結果、大変残念なのですが、子宮頸部に癌が発見されました」



砂子「子宮頸部？…、癌？」

潤一「その新製品用のパッケージ袋がこちらです」

産婦人科医「子宮は袋状になっている臓器で袋の口の部分を頸部と言います。そこに癌が見つかりました」

潤一「御社のマスケット、モーちゃんをイメージして、牛柄の白黒模様をつけました」

産婦人科医「この部分が癌です」

潤一「はい、自信を持ってデザイン致しました」

砂子「私、どうすれば？」

産婦人科医「子宮ごと患部を摘出します」

砂子「子宮ごと？」

潤一「嬉しそうに」全部ですか？」

産婦人科医「卵巣、卵管、子宮を支えている周囲の組織全てを取り除きます」

潤一「嬉しそうに」本当に全部ですね？」

産婦人科医「安心してください。人は生きていれば必ず病気になります。なったら治しましょう。これは普通のことなんですから」

砂子「はい」

産婦人科医「それから妊娠5週目でした。ですが妊娠を継続するのは難しい状況です」

潤一、スローモーションでガッツポーズする。

潤一「ありがとうございます！」

産婦人科医、退場。舞台の中央では、砂子、椅子にもたれかかって、しばらくぼーっと座っている。

第14場 潤一と砂子の新居

潤一が意気揚々と帰ってくる。

潤一「ただいま！」

砂子「おかえり」

潤一「どうしたの？」

砂子「ううん、どうだった？プレゼント」

潤一「なんだろうねえ。自分のはつきりと見えたっていうか。ここ

でこの語調でこう言うんだ、ここはこういう手振りでこの声の高さでっていうのが完璧にイメージどおりだった」

砂子「そう」

潤一「文句なしで即採用！部長からは超褒められるし最高の結果だね、、、それよりさ、これ」

潤一、靴からプレゼントの包みを取り出して、砂子に渡す。

砂子「、、、」

潤一「開けて」

砂子が包みを開けると、赤ちゃんの服が出てくる。

潤一「さすが君の会社だね。お洒落なのばっか。どう？男の子でも女の子でもどっちでも似合うものを選んだんだ。まあ靴下と靴はつい女の子に似合うの買っちゃったんだけどね」

砂子、突然、泣き出す。

潤一「え？」

砂子「ごめんなさい」

潤一「いや、どうした？」

砂子「(遮るように) 潤一、これにサインして」

潤一「何これ？」

砂子「手術の同意書」

潤一「手術？」

砂子「妊娠してたよ、私、、、でも癌も同時に見つかったって」

潤一「、、、」

砂子「子宮頸癌っていう癌。別に珍しいものじゃなくてどんな女性にも起こりえること。しかも良かったでしょ？今、手術で全部取っちゃえば私の命は助かるって」

潤一「全部？子宮を全部取っちゃうの？」

砂子「そうよ」

潤一「砂子」

砂子「(遮って) でもそうすれば確実に助かるのよ」

潤一「赤ちゃんは？」

子「五週目だって。でも癌がもうステージⅡでね、出産まで手術を

遅らせたなら、私はその後半年しか生きられないって、ははは」

潤一「、、、」

砂子「産もうかな」

潤一「は？」

砂子「私、産もうかな」

潤一「何言ってるんだよ」

砂子「だって欲しいでしょ？子供。子宮取っちゃたら二度とできな

いんだよ」

潤一「いららないよ。砂子の命のほうが大事だよ」

砂子「なんで嘘つくのよ」

潤一「え？」

砂子「怒鳴って）どこの世界に妊娠の兆しがあったただけで赤ちゃんの服買って来る馬鹿がいるのよ」

潤一「、、、」

砂子「子宮を取るってことはあなたはもう父親にはなれないのよ！」

潤一「君の命のほうが大事だよ」

砂子「嘘よ」

潤一「嘘じゃないよ」

砂子「嘘よ」

潤一「嘘じゃない」

砂子「、、、」

潤一「、、、」

砂子「産みたいの。どうしても」

潤一「ダメだって」

砂子「この子の命は？」

潤一「、、、」

砂子「私は癌と一緒にこの子の命を摘み取るの？」

権藤宣子の声「自分の子供を手にすることができない人々がいます」

## 第15場 マザードリムの説明会

権藤宣子、登場。潤一、退場。

権藤宣子「子宮が生まれながらにしてない女性や子宮癌で子宮を全摘出してしまった女性。彼女たちを救うことができる唯一の方法が代理出産です。そこで私共マザードリムは、代理出産事業を新たに立ち上げることに致しました。何かご質問はございますか？」

砂子をはじめ、何人がハイッと手を挙げる。

権藤宣子「では、その方、どうぞ」

砂子「代理出産は日本では禁止されていると聞いたんですが」

権藤宣子「禁止されているわけではなく法律がないのです。何が正しい代理出産で何が正しくない代理出産なのか、社会の中でコンセンサスが取れていない。ですから私共は提供したいのです。必要であれば誰もが手を伸ばせる新しい選択肢として。だって技術はあるんですから」

砂子「でも具体的には何をどうすれば」

権藤宣子「コンセンサスを取っていきましよう。私共がテストケースとして行った国内初の代理出産は姉妹間で実施されたものでした。子宮摘出手術を受けたお姉さんのために妹さんが自ら申し出たのです。まず「家族の中でのコンセンサスを取ってみましよう」

29

親戚のおじさんおばさん合唱団、登場。たまひよテーマソングを歌う。その合間に、

おじさん1・2、おばさん1・2（低い声で）子供はいつ〜子供はいつ〜」

権藤宣子、合唱団、退場。

第16場 礁子の部屋

礁子、ベッドに寝転がっている。砂子、その前で立っている。

礁子「どうしたの？お姉ちゃんから突然会いたいなんて。珍しいじゃない？」

砂子「ねえ、礁子」

礁子「ん？」

砂子「一生のお願い」

礁子「え？何？」

砂子「私あんたにお金貸してあげたよね？」

礁子「え？あ、うん」

砂子「いいのよ、全然気にしなくて。困った時に貸せるものがあったらそりゃあ貸すわよ。家族なんだから。血の繋がった姉と妹なんだから、、、それでね、今度はあんたに私が借りたいものがあるのよ」

礁子「私、お金なんか貸せないよ？」

砂子「馬鹿、あんたにそんなこと期待するはずないでしょ？」

礁子「じゃあ何よ？」

砂子「お腹貸して」

礁子「はい？」

砂子「お金貸したからお腹貸して、ははは」

礁子「え？え？どういう意味？」

砂子「実はね、私、子宮を取ったの、癌になって」

礁子「え？」

砂子「、、、、」

礁子「え？嘘でしょ？」

砂子、服をめくってお腹の手術の傷痕を見せる。

砂子「私、赤ちゃんを殺したの。自分の命のために」

礁子「いつ？」

砂子「この間よ。でもそれはもういいの。終わったことだから。私は次に進みたいのよ」

礁子「、、、」

砂子「マザードリームって会社があるの知ってる？」

礁子「知らない」

砂子「簡単に言うけどね、古くなって質が落ちる前に卵子を冷凍保存しておきましょうってそういうサービスがあったの。半信半疑だったのよ、最初は。だって百万もするのよ。独身女の弱みに付け込んでない？そう思うでしょ？でもさ、私、受けたの、このサービス。一年前に」

礁子「、、、」

砂子「今思えばやっておいてよかったよ。だって卵子があるんだもん。もちろん、潤一さんの精子も問題なく手に入る。だからあともう一つ、受精卵が着床するための子宮さえあれば、、、子宮さえあれば私も普通に子供を授かることができる」

礁子「ないから」

砂子「ないって..」

礁子「無理よ、貸せない」

砂子「なんで？」

礁子「だって、えっ？」

砂子「えっ？」

礁子「えっ？」

砂子「えっ？」

礁子「だってそうでしょ？実際に妊娠するのは私でしょ？」

砂子「妊娠は礁子がするけど私の子なの」

礁子「彼氏になんて言うの？お腹が大きくなってるとけどこれ私の子じゃないの。お姉ちゃんの子なのって言うの？」

砂子「言ってよ。そうやって」

礁子「無理。私にはできない」

砂子「バイトだって思いなさいよ」

礁子「は？」

砂子「あなたに貸してるお金あるでしょ？あれ返さなくていいから。

その代わり、、、ね？すぐ割りのいいバイトだって思っつて。ポ—

ナスも出すから。いくらがいい？」

礁子「何言ってるの？」

砂子「ははは、頭おかしくなったと思っつてるでしょ？マジだから。

考えてよ。礁子がお腹貸してくんなかったから、お姉ちゃん、赤

ちゃんと会えないんだよ？イナイイナイバアできないんだよ？」

礁子「無理よ！私のお腹は私のんだから！」

父親の声「お前、そ、そ、それストレートすぎるよ。もっと」

何て言っつもの、、、まわりくどく行こうよ」

## 第17場 河野家

父親、母親、登場。礁子、退場。

父親「母さんをいくつだと思っつてるんだよ？、、、今年で59だぞ？」

母親「61です」

父親「細かいことは置いといてさ、お前、61のお母さんに」

砂子「子宮は女性の身体の中で比較的年を取らない臓器で」

父親「だからって」

母親「遮って、砂子に」あきらめよう」

砂子・父親「、、、」

母親「礁子から聞いた。辛かったよね？ごめんね。お母さん、砂子のそばにいてあげられなくて」

砂子「私は大丈夫だから」



母親「お父さんもこんなだからアレだけど」

父親「こんなくて」

母親「本気であなたのことを心配してるのよ」

砂子「、、、」

母親「砂子、、、子供を授からない幸せだってあるわよ」

砂子「何それ？、、、孫の顔が見てみたいって言ったよね？」

母親「言ったよ」

砂子「それはもういいわけ？」

母親「、、、」

砂子「はは、そうよね。まだ礁子がいるもんね」

母親「礁子は関係ないわよ」

砂子「あの子、裏切ったの。私は礁子の夢ずっと応援してたのに。

借金も私が肩代わりして。お母さんとお父さんには言わないでっ

て言うから内緒で。なのにやってくれない」

母親「わかったから、落ち着きなさい」

父親「砂子、あちらのお母さんに頼むのはどうだろう？」

母親「馬鹿、頼めるわけじゃないでしょ？」

父親「ダメで元々さあ」

砂子「お母さん」

母親「、、、」

砂子「私、お母さんよりもずっとずっと、赤ちゃんの顔が見

たいの」

母親「お母さんだって砂子の赤ちゃんに会いたいわ」

父親「父さんもだよ」

砂子「じゃあ」

母親「私が産んだら私の赤ちゃんなのよ。砂子の赤ちゃんにはなら

ないの」

砂子「そんなの法律の問題でしょ!!」

母親「法律だけの話じゃない。十月十日母と子が一緒につながって  
いる時間が親子の関係を作るの」

砂子「私はどうすればいいの？」

母親「……」

砂子「それが母親だって言うなら、私はどうすればいいのよー」

母親「砂子」

砂子「(母親の言葉を遮って) お母さんは産んだ女だもんね。(怒鳴  
って) 産めなくなった女の気持ちなんかわからないわよね！」

第18場 マザードリーム・オフィス

権藤宣子、潤一、登場。父親、母親、退場。

権藤宣子「そうですね。ご家族の同意は得られなかったんですか」

砂子「……」

潤一「(砂子を見て) はい」

権藤宣子「残念です」

潤一「何か他に方法はないんでしょうか？」

権藤宣子「あと、どれくらいお金かけられます？」

潤一「どういう意味でしょうか？」

権藤宣子「かけられるお金によって選択肢は変わってきます。例え  
ば、国外に目を向けてみる。アメリカで頼むとざっと千五百万円。

下手をすれば倍」

潤一「三千万ですか？」

権藤宣子「正直、代理出産は高くつきます。そしてそのお金を払っ  
ても必ず成功するわけではありません」

潤一「砂子」

砂子「何？」

潤一「考え直そう」

砂子「え？」

潤一「三千万だぞ？」

砂子「だから？」

潤一「俺の年収を考えろよ」

砂子「子供が持てるのよ？」

潤一「必ず持てるわけじゃないんだよ？」

権藤宣子「わかりました！私共マザードリームは選択肢を提供する会社です。品質を保ちつつ、もう少し安くできるところをご紹介しましょう。インドです。インドでならアメリカの十分の一のお値段でご提供できます」

インドの音楽が聞こえてくる。砂子、潤一、権藤宣子、退場。

第19場 グローバル・ベイビー・ファクトリー

インドの代理母が、工場の生産ラインのように、赤ん坊を産みまくるダンスシーン。

第20場 デサイ・サロガシー・クリニック

クリニックの廊下。大勢の人が自分が呼ばれるのを待っている。その内の一組。ナジマとマルパニ。インディラ、登場。

インディラ「ナジマ・ヴァグラ」

ナジマ「はい」

インディラ、ナジマの隣にいるマルパニを見る。

ナジマ「主人です」

インディラ「来て」

インディラ、歩き始める。ついていくナジマとマルパニ。

インディラ「あんた誰の紹介だったけ？」

ナジマ「カマラっていう人」

インディラ「いくら払ったの？」

マルパニ「一万ルピー」

インディラ「(立ち止まり) それ結構取られてるわよ」

マルパニ・ナジマ「え？」

インディラ「たくカマラの奴」

ナジマ「でも紹介してもらえなかったらこのこと知らなかったし

他に働けるところもないし」

インディラ「まあそうだろうね、(ナジマとマルパニを見て) 旦那

の借金を返す家族想いの妻ってところか(歩き出す)」

マルパニ「、、、、」

インディラ「大丈夫よ、返せるわ。私もそうだったから」

インディラ、ドアの前で立ち止まる。

インディラ「待ってて」

部屋の中では、デサイがスマンと話をしている。

デサイ「いい？このままでと子供が育つには狭すぎるの。だから減  
数手術をしなくちゃならない」

スマン「でもマダム」

デサイ「クライアントも三人は望んでないの。わかる？」

スマン「一人、私が引き取ります。私の歳だと、この先子供が産めるかわからないから」

デサイ「(強く) そんなことはできないのよ」

スマン「…、はい、マダム」

デサイ「手術は来週行います。いい？」

スマン「はい、マダム」

デサイ「部屋に戻っていいわ」

スマン「はい、マダム、失礼します」

スマン、出て行く。

インディラ「入って」

ナジマを先頭に、マルパニ、インディラの順番に、部屋の中に入る。

インディラ「ナジマ・ヴァグラです」

ナジマ「ナマステー」

マルパニ「ナマステー」

デサイ「ようこそ！デサイ・サロガシー・クリニックへ。座って」

ナジマ「はい」

ナジマたち、座る。インディラ、退場。

デサイ「あなたはここで誰かに幸福を与える。それが私の心からの願い。もちろん、あなたもここであなた自身の幸福を手に入れる。」

頑張って」

ナジマ「はい」

デサイ「いくつか質問するわね。出産経験は？」

ナジマ「一回です」

デサイ「いつ？」

ナジマ「五年前です。女の子を産みました」

デサイ「あなたの娘ならきつと可愛いお嬢さんね。いいわ。さて出

産に伴うリスクは理解してる？」

ナジマ「どんなリスクでしょうか？」

デサイ「帝王切開は知ってる？」

ナジマ「帝王切開？」

デサイ「お腹を切るのよ。お腹を切って赤ちゃんを直接取り出すの」

ナジマ「ああ、あれが」

デサイ「もちろん、あなたがそうしなくてはできない限りしない

ようにするけどね」

ナジマ「はい」

デサイ「ごく稀にたくさん出血することがある。ごく稀に子宮を取らなきゃいけないことがある。ごく稀に命を落とすことがある。

でも、クライアントとクリニックはその責任は取れない？それで

OK？」

ナジマ「はい」

デサイ「何か質問は？」

マルパニ「報酬は？」

デサイ、優しく笑う。

デサイ「妊娠期間中は一月3万ルピ、成功報酬は30万ルピ」  
マルパニ「……」  
「クツと生唾を呑む」

デサイ「凄いでしょ？」  
マルパニ「はい」

デサイ、ナジマに契約書を差し出す。

デサイ「問題なかったらここにサインして」

ナジマ「私たち、字が書けないんです」

デサイ「ごめんなさい。私がお手本を書くからそれをなぞって書いて。(メモに書きながら) ナジマ・ヴァグラね、はい」

ナジマは、デサイから受け取ったメモをなぞって、自分の名前を書く。

デサイ「うまくいけば家も建てられるわ。あなたたち家は持っている？」

ナジマ「持ってません」

デサイ「頑張って手を伸ばせば持てるわよ、家」

ナジマ「頑張ります」

デサイ「サインの入った契約書を受け取り、満足気に」じゃあ、あ

なたの情報カタログに登録しておくわね」

権藤宣子の声「スマン・ヴォーラ、35歳、職業メイド、出産2回」

権藤宣子、登場。ナジマ、マルパニ、デサイ、インディラ、  
退場。

第21場 マザードリーム・オフィス

ソファアに座って代理母のカタログを見ている砂子と潤一。

権藤宣子の声に合わせて、スーマン・グプタ、登場。

権藤宣子「アニラ・マクヴァナ、24歳、職業無職、出産1回」

アニラ・マクヴァナ、登場。

権藤宣子「ルビナ・ラクダワラ、35歳、職業無職、出産2回」

ルビナ・ラクダワラ、登場。

権藤宣子「ナジマ・ヴァグラ、29歳、職業農家、出産1回」

ナジマ・ヴァグラ、登場。それは代理母カタログの立体化。  
褐色の肌をした代理母たちが並ぶ。

40

権藤宣子「ページの裏にはそれぞれの身長、体重、家族構成、全て  
記載してあります」

代理母たちが後ろを向くと、背中に個人情報ギッシリと書  
かれている。

権藤宣子「どれでもお好きな代理母をお選びください」

砂子、カタログをパラパラとめくる。

潤「たくさん、いるんだね」

砂子「そうね」

潤「みんなインドの人だ」



榎藤宣子「意外ですか？」

潤一「いやそういうわけじゃないんですけど」

榎藤宣子「元々インド社会には子孫を残すことは神聖な義務だとい  
う宗教観があります。子供がいない人に対する共感の念が他の国  
に比べて非常に強い。当然、子宮を提供できることを喜びに感じ  
る人も多いんです。つまり、インドの代理母には間違いがない。

お好きな方をお選びいただいて大丈夫です」

潤一「そう言われても（砂子に）なあ」

砂子「何を基準に選んだらいいんですかね？」

榎藤宣子「そうですね。私でしたら足を見ますね」

砂子・潤一「足？」

榎藤宣子「赤ちゃんの部屋をきちんと支えている足かどうか。なら、

細い脚よりはドッシリとした脚のほうがいい」

砂子「ドッシリとした脚？」

榎藤宣子「短くて太い、象のような脚ですかね？」

潤一「それはどうだろうか？」

榎藤宣子「え？」

潤一「象のような脚はよくない。脚で選ぶなら彼女だよ」

榎藤宣子「細すぎませんか？」

潤一「いいじゃないですか？」

榎藤宣子「モデルを選んでるわけじゃないんですよ。代理母の脚で  
す。この脚はすぐ転ぶ危険性がある」

潤一「いや、脚なら彼女だよ」

砂子「潤一、脚で選ぶのは止めましょう。すみません、他の基準は？」

榎藤宣子「いや、どの代理母も素晴らしい女性です。誰を選んでも

大丈夫です」

潤一「でもさっきは脚を見ろって」

榎藤宣子「敢えて言えばです」

砂子「もう一度、敢えて言っと」

権藤宣子「人気なのは太っている代理母ですね。少しふっくらとしていたほうが赤ちゃんをしっかりと守ってくれる感じがするんじゃない。ただ」

砂子・潤一「ただ？」

権藤宣子「脂肪のつきすぎは産道を狭くします。何事もバランスが重要ですね」

砂子「なるほど」

権藤宣子「その点から言っていると彼女なんかどうですか？大きくていいお尻を持ってる。安産型のお尻です」

潤一「いいんじゃないかな？脚も太すぎないし」

権藤宣子「細すぎないし」

砂子「でも服のセンス悪くない？」

潤一・権藤宣子「え？」

潤一「それ重要？」

砂子「雑誌で読んだんだけどね、赤ちゃん時代の環境はその後の人生に大きく影響するんだって。どうせなら服のセンスのいい代理母がいいなあ」

潤一「モデルを選んではいけないんだよ。代理母を選んではいけない（と言いながら、権藤宣子を見る）」

権藤宣子「いいんですよ。ごゆっくりお二人の趣味に合う代理母を選んでください。そのためにこのカタログがあるんですから」

砂子「、、スマン、アニラ、ルビナにナジマ。スマン、アニラ、ルビナにナジマ。聞いたことのない名前。耳に馴染まない音。響きの遠さが私たちの世界と彼女たちの世界を隔てる、、でもナジマ、、彼女の名は響いた。ナジマ」

代理母たち・潤一「（一緒に）ナジマ」

砂子「耳に届いた。馴染まない音の中から確かに届いたナジマ」

代理母たち・潤一（一緒に）ナジマ」

砂子「彼女にするわ。ナジマ・ヴァグラさん」

権藤宣子「かしこまりました。では早速、現地に連絡してみます」

権藤宣子、ノートパソコンでメールを素早く打つ。代理母たち、退場。

砂子「あのう」

権藤宣子「はい」

砂子「彼女の写真をもらえませんか？」

権藤宣子「写真を？」

砂子「はい。お守り代わりに持っておきたくて」

権藤宣子「これでよければ。どうぞ」

権藤宣子、砂子にナジマの写真を渡す。

権藤宣子「今、現地から情報が返ってきました。それによるとですね、代理母の月経周期から計算して、お二人の受精卵を急いでインドに送ったほうが良いということがわかりました。ご主人の新鮮な精子が今すぐ必要です」

潤一「え？」

権藤宣子「男子トイレがこちらにあります。この容器にご主人の新鮮な精子を取ってきてただけませんか？」

権藤宣子、潤一に容器を渡す。

潤一「え？これに？」

権藤宣子「はい。この容器に」

潤一「あ！これ、、、うちの会社の製品じゃないですか？こんなとろにも納品してたんだ」

権藤宣子「あのう、今すぐお願いします」

潤一「今すぐ？」

権藤宣子「はい」

潤一「精子を？」

権藤宣子「新鮮な精子を」

潤一「なるほど」

権藤宣子「、、、」

潤一「、、、」

権藤宣子「奥様、ちょっと席をはずしてもらえますでしょうか？」

砂子「え？」

権藤宣子「ちょっと席を」

砂子「え？あ、はい。わかりました」

砂子、席をはずす。

権藤宣子「何もない中で想像力だけではちよっと難しいですよね？」

潤一「、、、」

権藤宣子「私の（指を動かして）でイキます？」

潤一「え？」

権藤宣子「実は昔、そういう仕事を」

潤一「、、、」

権藤宣子「久し振りに見せましょうか、テクニック」

潤一「それはちよっと」

権藤宣子「雑誌もありますけど。どっちがいいですか？選んで」

潤一「、、、雑誌を貸してください」

権藤宣子「あら残念（と言って雑誌を渡す）」

雑誌を受け取った潤一、トイレへ入っていく。すると、チクワハンペン、ミソスープ、オニギリ、スキヤキが現れる。

潤一の声「はあはあはあはあ」

チクワハンペン「聞こえるか？」

ミソスープ「え？」

チクワハンペン「親父が呼んでる」

ミソスープ「親父？」

チクワハンペン「しっ！（静かにのジェスチャー）」

潤一の声「はあはあはあはあ」

チクワハンペン「親父が俺たちを必要としている。おい、みんな出

発の準備だ！」

オニギリ「え？今？」

スキヤキ「(遅れて登場)どっしたの？」

オニギリ「行くんだって」

スキヤキ「どこに？」

チクワハンペン「行けばわかるから、行くぞ！」

ミソスープ「待った」

チクワハンペン「何だよ？」

ミソスープ「俺は行かない」

チクワハンペン「は？」

ミソスープ「外に出れば競争社会って噂だ」

チクワハンペン「そっだよ。戦おうぜ」

ミソスープ「俺はここでまったりと暮らす」

チクワハンペン「は？精子として生まれてきたのに生死を賭けたく

ないって言うのか？」

ミソスープ「無駄死にしたらどうする？女体だと思って飛び込んだ

らティッシュだったってのはよく聞く話なんだぞ？」

潤一「はあはあはあはあ」

ミソスープ「ほら、お前も怖くなってる」

チクワハンペン「うるさい！」

睨みあう、ミソスープとチクワハンペン。

オニギリ「あのさあ」

ミソスープ・チクワハンペン「なんだよ？」

オニギリ「俺たち、死ぬとかないから」

ミソスープ・チクワハンペン・スキヤキ「は？」

オニギリ「そもそも生まれてないから」

チクワハンペン・スキヤキ「あ」

オニギリ「命じゃないのよ、俺たち。生命じゃないの。動く蛋白質にすぎないの」

ミソスープ「死なないの？俺たち」

オニギリ「死ねない。死ねない。そういう範疇に入れない」

ミソスープ「ティッシュに飛び込んでも？」

オニギリ「まあ干からびてゴミになるだけだね。命じゃないから」

ミソスープ「ゴミになるだけ？」

オニギリ「そ」

ミソスープ、オニギリとハイタッチ。

ミソスープ「親父。俺、誤解してた。親父が俺たちのこと虐殺

してるんだとばかり思ってた。違っただね、ごめん」

チクワハンペン「じゃあどうする？みんなで行っちゃおう？」

スキヤキ・ミソスープ・オニギリ「いいねえ！、え？」

精子たち、揺れ始める。

潤一「はあはあはあはあ」

精子たち「おおおおお、おおおおお、あっ」

精子たち、ジャンプ！

潤一・精子たち「はあはあはあはあ」

権藤宣子と砂子、登場。

第22場 体外受精のシーン

権藤宣子「ご覧ください」

スキヤキ、オニギリ、ミソスープ、チクワハンペン、満員電車  
車で帰るサラリーマンのように疲れている。

権藤宣子「なんか満員電車で帰るサラリーマンみたい」

砂子「あんたたち、シャキッとしなさいよ！」

スキヤキ、オニギリ、ミソスープ、チクワハンペン、一瞬、  
シャキツとするが、すぐに疲れてダラダラ動く。

精子たち「酸素がっらいっ」

砂子「ダメじゃない、こいつら」

潤一「いきなり言われて、元気なのを出せるはずないだろ？」

砂子「そういう問題？」

潤「他にどついう問題だよ？」

権藤宣子「まあまあ。顕微授精にすれば問題ないですから」

砂子・潤「顕微授精？」

権藤宣子「顕微授精法は、顕微鏡下で細いガラスの針を使って精子を卵子の中に入れてあげる方法です。まず卵の方を細いガラス管で固定します」

クジャク、登場。

権藤宣子「そこに精子を一匹」

チクワハンペン「おい、どこに行く？」

ミススープ「俺達置いてくのか？」

スキヤキ「わかんないよ」

オニギリ「スキヤキ、行くな！」

精子たち「帰って来いって！」

権藤宣子「この方法なら、運動性の弱い精子と膜が硬い卵子の組み合わせでも」

スキヤキ「あ、どうも」

クジャク「え？」

スキヤキ「ちよつと失礼します」

クジャク「え？まだ準備できてないんだけど」

スキヤキ「そんなこと言ったって。あれ？目が？目が回るー！」

クジャク・スキヤキ「あーーー！」

権藤宣子「確実に受精することができます」

クジャク（卵子）にピペットが突き刺さる。そして、デザイの代理出産クリニックで行われている胚移植のイメージと、



少しずつ重なっていく。そこには、デサイと、診察台に横になっっているナジマがいる。

デサイ「受精してしばらくすると受精卵は細胞分裂を始めます。一つが二つに、二つが四つに」

台詞に合わせて、透明なビニール傘を持ったアンサンブルが現れる。傘を開いたり、クルクルと美しく回したりして、細胞分裂の様子をダンスで表す。

デサイ「分裂していくのです。分裂し始めた卵は顕微鏡のライトに反射して星のようにキラキラ輝きます。生命の神秘。最も美しい瞬間です。その卵を、今度は子宮の入口からカテーテルで子宮腔内に注入するのです」

ナジマ「ああ！」

デサイ、説明をしながら、ナジマの股にカテーテルで受精卵を注入する。暗転。暗闇の中で、砂子と権藤宣子の声が響く。

砂子の声「妊娠の可能性はどれくらいでしょうか？」

権藤宣子の声「統計的には約30%です」

砂子の声「じゃあ三回に一回しか妊娠しないんですね？」

権藤宣子の声「統計的には。でも一回で妊娠する人もたくさんいます」

砂子の声「何度やってもうまくいかない人もいますよね？」

権藤宣子の声「そうです。これだけは神のみぞ知る領域です」

スタンドライトがつき、ベッドで寝ている砂子と潤一が見えてくる。砂子、ナジマの写真を見ている。

砂子「その夜は眠れなかった。私は蒲団から這い出して、インドのマハラシュトラ州カランギ村をグーグルで調べた。ナジマの住む村。クリックすると、白い綿の花が画面をいっぱい埋め尽くした。ずっと遠くまで広がる綿花畑。色とりどりのサリーに身を包んだ女たちが、一生懸命その白い花を摘んでいる。ナジマもこんな風に綿花を摘んでいたのだろうか？この景色の中で私の赤ちゃんは十ヶ月という時間を過ごすのだろうか？」

夢の中での出来事のように、サリーに身を包んだ女たちが現れては花を摘み、ゆっくりと消える。砂子、横で眠る潤一を見る。潤一は、スヤスヤ眠っている。砂子、潤一を起こす。

50

潤一「痛いよ」

砂子「よく眠れるね。私は心配で眠れないのに」

潤一「しょうがないだろ？明日朝早いんだから」

砂子「眠れない妻を寝かせてから眠る、そういう優しさはないの？

あなたの子供のことで悩んでるのよ？」

潤一「できること全部やったんだから俺達が悩んでもしょうがないだろ？」

砂子「本当に全部？あなたお祈りした？私達が祈らなきゃ、ちゃんとお願いしなきゃ授かるものも授からないよ」

潤一、棚から袋を出して、砂子に渡す。砂子、中身を出す。

砂子「お守り？」

潤一「東京中の神社の」

砂子「どうしたの？これ」

潤一「俺外回りだから。営業のついで」

砂子「ありがとう」

潤一「産むのはナジマだから。気休めだけど」

砂子「い、」

潤一「い、」

砂子「潤一」

潤一「ん？」

砂子「私、親になれるかなあ？」

潤一「ダメだったら、その時に考えよう」

砂子「違っの」

潤一「違っって何？」

砂子「もし妊娠しても、赤ちゃんはナジマの産道を通って産まれて

くる。ナジマが産んだらナジマの赤ちゃん」

潤一「いいじゃん。ナジマの赤ちゃんだって。妊娠してくれれば。

産まれて来てさえくれれば。一緒に暮らせれば」

砂子「い、」

潤一「産むだけが親じゃないだろ？育てるのだって大変な仕事だ

ぜ。」

砂子「そうね」

潤一「とにかく今はゆっくり待とう」

と、言いながら、潤一は眠る。砂子、ナジマに宛てた手紙を  
書き始める。ナジマ、登場。

ナジマは砂子から送られてきた手紙を読み、砂子はナジマから送られてきた手紙を読む。

ナジマ「親愛なるナジマ。あなたの夢を見てこの手紙を書いています。

私には夢がなかった。夢。寝て見る夢じゃなくて起きて見る夢。

あなたの国の言葉でも二つの夢は一つの言葉？病気になる前、私はただなんとなく生きてただなんとなく幸せだった。でも病気になるっていろんなものを失って今は夢を持つてる。赤ちゃんに会いたい。私たちの遺伝子を持った、あなたの赤ちゃん。引き受けてくれてありがとう。あなたのおかげで私は本当の夢が持てたの」

砂子「親愛なる砂子。お手紙ありがとう。私はイングリッシュが読めないで、この手紙はデサイ先生が代わりに書いてます。私の言葉が知らない国の文字になって空を飛んであなたの元に届くんですね。まるで魔法みたいに。実は私、英語だけじゃなくて文字が読めないの。手紙なんかもらったこともないし、書いたこともない。またお手紙もらえますか？私、次のお返事は、自分で書いてみようと思います。追伸、私たちの言葉でもサブナーは二つの意味が重なっている言葉です」

ナジマ「親愛なるナジマ。驚きです。サブナー。インドの言葉でも夢は寝て見る夢と、起きて見る夢の、二つの意味を持っているんだね。なんで夢はどこの国でも二つの意味で一つの言葉なんだろう？」

砂子「これは偶然などではないってデサイ先生は言っていました。人は、自分の願望を眠りと共に夢に見る、私たちの祖先は、このことを直感的に知っていたのだそうです」

ナジマ「だからどの国の言葉でも、夢はいつも、二つの意味が重なり合ってる」

砂子「夜、眠りと共に夢を見て」

ナジマ「そして、自分の夢と向き合っ」

砂子「夢はいつも人の根源的な営みで」

ナジマ「これからも人は夢を見続けるのだと思う」

砂子「親愛なる砂子。私の夢は手紙を書くことでした。そして、今、その夢が叶っています。ありがとうございます。今度は私があなたの夢を叶える番です。神様があなたに赤ちゃんを授けてくださりますように」

砂子と潤一の寝室は暗転する。

第25場 デサイ・サロガシー・クリニック・代理母ハウス

ナジマ、鼻歌を歌いながら、文字の勉強をしている。

ルビナ「そんなに手紙書くの、楽しい？」

ナジマ「あ、起きた？」

ルビナ「下手糞な歌のせいだね」

ナジマ「ルビナとは違っもん」

ルビナ「また文字の勉強？」

スマン「この人、文字が恋人なのよ。旦那と会えないから文字とセックスしてるの。欲求不満なのよ」

アニラ「欲求不満はあんたでしょ？寝言で旦那の名前言ってたわ

よっ」

スマン「嘘？」

アニラ「ケケケ。それも涎垂らしながらね。それ、その時の涎のシ

ミよ」

スマン「寝言ぐらい言うわよ。全然会ってないんだからさ」

アニラ「普通は離れて暮らす我が子の夢を見るもなんじゃやないの？なのにあんたは夫の夢ばかり」

ルビナ「いいじゃない、夫の夢を見るぐらい」

スマン、目から涙が出てくる。

アニラ「私は見ない。私を全然大切にしない男だったから」

スマン「でも旦那が生きてればこんなことやらずに済んだんじゃないの？」

アニラ「夫の収入は月5千ルピーだった。どっちにしるやってたわねきつと」

スマン「う、う、うえーん」

アニラ「なんであんたが泣いてんのよ？」

スマン「うちの旦那の方が稼ぎが少ない」

ナジマ「ねえ、みんな」

アニラ・スマン・ルビナ「何？」

ナジマ「みんなの夢は何？寝て見る夢じゃなくて起きて見る夢」

アニラ「食べても食べても太らない身体が欲しい」

ナジマ「私、真面目に聞いているんだけど」

スマン「美白クリーム買いまくってこの黒い肌を捨て去りたいね」

ナジマ「もういい。聞かない」

ルビナ「この仕事を少なくとも50までは続けることかな？」

ナジマ「無理でしょ？それは。このクリニックで出産できるのは4

0まででしょ？」

ルビナ「移籍すんのよ40になったら。聞いた話なんだけどね、5

5ぐらいまでやらせてくれるところあるらしいのよ。55よ。あと

何回産めると思う？10は堅いね。そしたら美白クリームなんて

いくらでも買えるね。ふふふ」

アニラ「55で産める？」

ルビナ「産めるよ。私たち産むプロなんだから」

スマン「私もやりたい55まで」

アニラ「私も」

ルビナ「次は家。家を買うの、もうすぐ。余ったお金で息子にスク

ールバッグを買ってあげる。それが私の夢」

ナジマ「いいお母さんね」

アニラ「十ヶ月もそばにいないけどね」

ナジマ「、、」

ルビナ「そうよ。もうすぐ5歳の誕生日なの。でも私はこっちの赤ちゃんと一緒。一体どっちの母親なんだろうね？」

アニラ、食べ物をはたすら食べる。

ルビナ「みんな、この仕事の大変なのはこれからだよ」

突然、電話が鳴る。

## 第26場 潤一と砂子の新居

砂子「その電話は早朝にかかってきた」

目を覚ます砂子と潤一。砂子、電話を取る。権藤宣子、登場。

砂子「(やや眠そうに) はい」

権藤宣子「芦田さん？」

砂子「はい」

権藤宣子「権藤です。お早うございます」

砂子「あ。おはようございます」

権藤宣子「成功しました」

砂子「え？」

権藤宣子「胚が、受精卵が無事着床したのを確認しました」

砂子「本当ですか？」

権藤宣子「本当です。おめでとございます」

砂子「ありがとうございます！」

権藤宣子「まだ安心しないでくださいね。大変なのはこれからですから」

砂子「ナジマに会いに行くことはできますか？」

権藤宣子「もちろんです。ただ、代理母に精神的ストレスを与えて、流産するのが一番怖い。待ち遠しいかもしれませんが安定期に入

ってからインドンドまで会いに行きましょう（と言って、退場）

砂子（モノローグ）電話の音が遠くなって、時間の流れが遅くなつて、その日から一日は48時間になった。一分は120秒になつて胸の鼓動が重低音で聞こえてくる」

暗転。

第27場 ナジマの子宮の部屋。

クジャクとスキヤキ、登場。

クジャク「起きた？」

スキヤキ「あれ？」

クジャク「五ヶ月も寝てたのよ」

スキヤキ「もしかして君がそばにいるってことは？」

クジャク「うん。私たち一つになったんだよ」



スキヤキ「やった？やった？やったっー!!」

スキヤキが思いっきり喜んでジャンプする！が、うまくいかない。スキヤキとクジャクは腰のところまで一つにつながっている。

スキヤキ「何これ？」

クジャク「もう私はあなたであなたは私」

スキヤキ「おい、ちょっと待って。俺は男だぜ？君は女だろ？一つになったらどうなるんだよ？」

クジャク「どっちかになるの」

スキヤキ「どっちになるんだよ？」

クジャク「それはこれから神様が決めるの。私たちは何もできない」  
スキヤキ「もしかしたらさ、俺なのに女になるのかよ？」

クジャク「そっよ」

スキヤキ「そんなの嫌だよ」

クジャク「嫌だつてどうしようもできないもん。私だつて男になる  
かもしれないのよ」

スキヤキ「女っ」

クジャク「男っ」

スキヤキ「……」

クジャク「……」

スキヤキ「女ってどんな感じ？」

クジャク「うまく言えないけど結構やわらかい感じね」

スキヤキ「へえ」

クジャク「男ってどんな感じ？」

スキヤキ「男はねえ、硬いよ。いろいろ硬い。頭も硬い。胸も硬い。

あそこも硬い」

クジャク「(股間を掴んで) 軟らかいじゃん」

スキヤキ「いざっていつ時に硬いの!」

クジャク「いざっていつ?」

スキヤキ「わかんないけど、、、もっと未来の話だよ」

クジャク「じゃあ、そのいざっていつ時に見せて。硬くなったあん

たを。(小指を出して) 約束ね」

スキヤキ「(小指を出して) 約束な」

スキヤキとクジャク、指きりげんまんをする。やがて、抱き合って、

スキヤキ「このままでいたいな」

クジャク「えっ」

スキヤキ「男にもならず女にもならず」

クジャク「……」

スキヤキ「温かいし、やわらかいし、こゝろ」

スキヤキとクジャク、眠る。代理母たちがゆっくりと登場。

第27場 デサイ・サロガシー・クリニク

膨らんだお腹の行列。まるで巨大な卵の群れ。全員横一列で並び、デサイが現れ、聴診器で全員のお腹を確認する。その仕草は工場製品を扱うかのように、丁寧だが冷たく。

デサイ「(一人ずつ確認しながら) 異常なし。異常なし。異常なし。

異常なし、、、では朝の食事を」

メイドと料理人が四角いお盆に載った朝食を持ってくる。代理母たちは、毎日決まっている自分の位置について、食事を取る。これらの動きも工場のベルトコンベアのように機械的に。デサイ、退場。マイクを持った那智と柳生が登場。

那智「アナンド、その牛乳の名前で有名な土地のある建物・代理母ハウスでは、随時15人の妊婦たちが集団で生活をしています。彼女たちの生活は最高に快適です。★なだらかな丘の上に建つ、広々としたクリニックで、専任の医師、料理人、メイドたちに守られながら十ヶ月あまりを過ごすのです。宗教やカースト等、所属するコミュニティが違ふもの同士が、一つ屋根の下で一緒に暮らすことはインドでは大変珍しいことであり」

アニラ（★マークのところから同時に）ナジマ、カメラだよ」

ナジマ「え?」

アニラ「写っちゃおう」

ルビナ「やめなさいよ」

ナジマ「私はいいいよ」

アニラ「一人は恥ずかしいでしょ?」

アニラとナジマ、那智の後ろを2回ぐらい通り過ぎる。

那智「あの、すみません」

ナジマ「ほら」

アニラ「ねえ、これティーヴィー?それともムーヴィー?」

那智「え?あ?テレビです」

アニラ「あなたジャーパーニー?」

那智「イエス」

アニラ「スシ!テンプラ!スキヤキ!」

那智「ああ、寿司、天ぷら、すきやき、はは」

アニラ「よく知ってるでしょ？私、世界中の食べ物の名前知ってる。

食いしん坊だから、ホホホ」

那智「(苦笑い) ははは。何言ってるかわからない」

ナジマ「なんだって？」

アニラ「インタビューしたいって(那智に) インタビュー、ね？」

那智「え？」

アニラ「(ナジマに) ほら、そうだって」

アニラ、カメラを意識して、服や髪を整える。自分のをサツと済ませると、ナジマの服と髪もパツと整える。

那智「どうします？」

柳生「いいんじゃないか別に。撮ろうと思ってたし」

アニラ「はい、じゃあ行きましょう。アクション！」

那智「あ、もう回ってるんですけど」

アニラ「ジャーパーンの皆さん、こんにちは。私はアニラ・マクヴ

アナ。こちらはナジマ・ヴァグラ。彼女は人見知りだから、彼女

への質問も私が答えるわ」

ナジマ「え？何？」

アニラ「大丈夫。私に任せて(那智に)「ご質問をどうぞ」

那智「え？あ、英語通じてるのかなあ？」

柳生「とりあえず何ヶ月か聞いてみる」

那智「あなたは妊娠何ヶ月？」

アニラ「こう見えて、六ヶ月ですの、ホホホ」

那智「妊娠してるのはどこの国の赤ちゃん？」

アニラ「アメリカ！」

那智「クライアントはアメリカ人が多いんですか？」

アニラ「アメリカとイギリスってのが一番よく聞くね。でもそれこそ世界中から来るよ。ヨーロッパ各国、アジアなら台湾、コーリヤー、それにジャーパンからも」

那智「日本からも？」

アニラ「もちろん、ジャーパンからだって。スシ！テンブラ！スキャキ！ホホホ。実はこのナジマもジャーパーニーの子供を妊娠してるのよ」

那智・柳生「え？」

那智「あなた日本人の子を妊娠してるの？」

ナジマ「え？私、、」

アニラ「ジャーパーニーの子供妊娠してるのかって」

ナジマ「はい」

那智「どんな感じですか？他人の子供を妊娠するのは？」

アニラ「他人の子供を妊娠するのはどんな感じか、だって」

ナジマ「自分の子供を妊娠した時よりもずっと気を遣います。これ

は仕事ですからね、、」

アニラ「ナジマ？」

那智「どうしました？」

ナジマ「いや」

デサイ「代理母に勝手に話しかけないでください」

デサイ、登場。

デサイ「(那智と柳生に)インタビューには私が対応するって言ったはずですよ。外に出ててください」

デサイ、アニラとナジマを見て、

デサイ「ベッドに戻りなさい」  
アニラ「はい」

アニラとナジマ、ベッドに戻る。デサイ、那智と柳生を連れて、代理母の部屋の外へ。

デサイ「代理母に余計なストレスを与えたくないんです。クライアントの大事な赤ちゃんを預かってるわけですから」

インディラ（助手）、登場。

インディラ「マダム、ちょっといいですか」

デサイ「すみません。また明日以降時間作りますので今日は終わりにしてください」

那智「あのお、さっきの彼女、日本人の子を妊娠してるって」

デサイ「はい、そうですが」

那智「日本人の夫婦を取材させていただくことはできませんか？」

デサイ「クライアントにはプライバシーがありますから」

那智「このドキュメンタリーは日本で放送されるんです。クリニッ

クの宣伝になると思います」

デサイ「いらっしやったら聞いてみるだけ聞いてみますが」

那智「いらっしやる？近々ここに来るんですか？」

デサイ「いや、あまり期待しないでください」

デサイとインディラ、退場。

那智「ほら、いたでしょ？日本人の依頼人」

柳生「美人だったな、代理母の彼女。きれいな褐色の肌だった」

那智「柳生さん、またそれですか？」

柳生「彼女、何ヶ月くらいだろう？」

那智「五ヶ月ぐらいですかねえ」

柳生「五ヶ月後、もう一回こっち来る予算あるか？」

那智「え？五ヶ月後？彼女に会いに？」

柳生「馬鹿。出産を撮るんだよ」

那智「ああ」

柳生「ああって。わかってないな？」

那智「すみません。わかってません」

柳生「これだから文字でしか考えられない奴は。インド人の腹から

日本人が生まれて来るんだぞ？」

那智「はい」

柳生「すごい画だぞ。褐色の美人代理母の腹から、黄色い日本人べ

イビーがポーン！って撮らなきゃ嘘だろ！」

那智「あ」

柳生「ゾクゾクしないか？自分たちの子供を一番安く培養できるの

はインド製容器。それが画ではつきりと撮れる」

那智「この企画はそういう俗情に媚びたものにしたくないです」

柳生「まず注目を集めないと。見てもらってはじめて成立するんじ

ゃないの？」

那智「それはそうですけど」

柳生「そもそも日本人はインドのことなんか全然知らないんだぞ？

カレー以外でなんか知ってるか？ほら。シヨッキングな画で惹き

つけないで何で興味持たせるんだよ」

那智「わかりました。予算については上と交渉します。でもそのた

めにも日本人の夫婦の素材がマストです」

柳生「、、どんな人たちだろうねえ」

那智「普通の人たちなんじゃないですか。ちょっとだけお金を持つ

てる」

柳生「お前（も結婚できなそうだから）だったらインドに買いに来る（か）？」

那智「来るわけないでしょ？」

柳生「でも百万ぐらいなら考えるだろ？」

那智「ほんとデリカシーがない」

柳生「きつとお前ぐらいの歳の奴らなんだぞ？」

那智「そうでしょうね。女が一番悩む年頃ですから。でも私は買いに来ません。これは人身売買ですから」

柳生「俺の間、部屋が寂しくて猫買っちゃったのよ」

那智「へえ、そうなんですか？」

柳生「インドで赤ちゃん買つのとそれってどれくらい違うんだろ  
う。」

那智「全然違います」

柳生「あ、そうですか、すみません」

那智「ホテルに戻って戦略練りましょ。どうやって接触するか」

柳生「はい。了解」

那智、柳生、退場。

第28場 デサイ・サロガシー・クリニック・代理母ハウス

ルビナ「ナジマ。どうしたの？急に」

ナジマ「、、、」

ルビナ「さっきから上ばかり見て。寝違えた？」

ナジマ「、、、」

ルビナ「何かあった？」

ナジマ「、、、」



ルビナ「何？」

ナジマ「、、、」

ルビナ「蹴られた？」

ナジマ「、、、」

ルビナ「当たり前でしょ？そりゃあ、赤ちゃんだって蹴ることぐら  
いあるわよ」

ナジマ「私の子じゃない、この子は」

ルビナ「、、、、そうよ」

ナジマ「でも今確かにお腹を蹴ったの。だからもうお腹見れない。

お腹見たら私、、、」

ルビナ「馬鹿。産むまですっと自分のお腹見ない気？」

ナジマ「、、、」

ルビナ「、、、」

ナジマ「ルビナ」

ルビナ「金もらいたかったら必死で気持ちを抑えな。ここではみんな  
なそうやってんの」

ナジマ「ねえ、お腹をいくら蹴ったってママへのアピールにはなり  
ませんよ。あんたが蹴ってるのはお母さんじゃないんだから。遠  
い国のおばさんだよ。いくら蹴ったって蹴ったって（お腹に愛し  
さを覚えて）痛いだけなんだから。ほんと痛いだけなんだから」

ルビナ「馬鹿。とりあえず何か食べな。食べて食べて、でっかいお  
腹は食べすぎでそうなったって思い込む」

ナジマ「それで気持ち抑えられる？」

ルビナ「私はできてるね」

ナジマ「奴がまた蹴ってきたら？」

ルビナ「ウンコが踊ってるって思い込む」

ナジマ「ウンコって踊るの？」

ルビナ「踊るの。踊るって思い込むのよ」

ナジマ「それで本当に抑えられる？」

ルビナ「私はできてるね」

ナジマ「……無理だよ、スキヤキのこと考えちゃう」

ルビナ「名前つけるな！」

ナジマ「え？」

ルビナ「つけたら情が移る」

ナジマ「ごめん」

ルビナ「今日、クライアントがここに来るんでしょう？」

ナジマ「……（頷く）」

ルビナ「それまでに気持ちのコントロールできてないと」

ナジマ、歌「『E.H.O.』を歌う。ナジマが歌い出すと、スマン、  
アニラ、ルビナと全員、歌い始める。やがて、歌が終わり、

インディラ、登場。

インディラ「ナジマ」

ナジマ「はい」

インディラ「お客さんよ」

権藤宣子と砂子と潤一、入ってくる。インディラ、退場。

権藤宣子「ここが代理母たちの部屋です。彼女がナジマです」

見つめ合う砂子とナジマ。

アニラ「誰？」

ルビナ「ナジマのクライアントじゃない？」

砂子「……」

ナジマ「……」

砂子「メーラー、ナーム、スナコ、アシダ、ハエ。(私の名前は芦田砂子です。) マエン、ジャーパーン、セ、アーイ、フーン。(私は日本から来ました) マエン、アプセ、ミルナー、チャーフティ、トヒイ。(私はあなたに会いたかった) ナマスター」

代理母たち、笑う。

スマン「凄い訛りね」

アニラ「子供みたい」

ルビナ「笑っちゃ悪いわよ」

スマン「でも」

代理母たち、笑う。

砂子「なんで笑ってるんですか？」

権藤宣子「芦田さんのヒンディーの訛りが面白いみたいです。でも

通じてますよ」

砂子「パテイ、ナーム、ジュンイチ、アシダ、ハエ(夫の名前は、

芦田潤一です)」

潤一「ナマスター」

代理母たち、笑う。

砂子「通じてますか？」

権藤宣子「通じてます。通じてます」

潤一「よかったね」

砂子「うん」

砂子、ナジマのお腹が少し膨れていることに気づく。

スマン「いくつなの？二十歳ぐらい？」

アニラ「さあ」

スマン「あんなに若くても子供が産めないのね」

ルビナ「ちよっと聞こえるわよ」

スマン「…」

ナジマのお腹を見ている砂子。その視線に気づくナジマ。二人目が合う。

ルビナ「あんたも何か話さないよ」

ナジマ「メーラー、ナム、ナジマ・ヴァグラ、ハエ」

砂子・潤一「はい」

ナジマ「…」

砂子・潤一「…」

ルビナ「それだけ？」

ナジマ「でも何を話したらいいか…」

ルビナ「クライアントが興味あるの（自分のお腹を示して）これ以

外にある？」

ナジマ「（ルビナに）わかった。（砂子に）… 砂子」

砂子「はい」

ナジマ「この子、最近、お腹を蹴り出したの」

権藤宣子「この子、最近、お腹を蹴り出したの」

砂子「え？」

ナジマ「触って」

権藤宣子「触って」

砂子、ナジマのお腹を触る。

砂子「動きますか？赤ちゃん」

権藤宣子「赤ちゃん、動く？」

ナジマ「はい」

砂子、ナジマのお腹に触る。しばらくして、ナジマのお腹が動く。

ナジマ「あっ」

砂子「(同時に) あっ」

潤「俺も触っていいですか？」

権藤宣子「彼も触って平気？」

ナジマ「はい」

潤「と砂子、ナジマのお腹に触る。しばらくして、ナジマのお腹が動く。

ナジマ「あっ」

潤「あっ」

砂子、目から涙が出てくる。すぐ顔を隠す。

潤「砂子？」

砂子「、、、」

潤「大丈夫？」

砂子「大丈夫」

砂子、鞆から袋を取り出し、

砂子「あのう、これ、お守りって言っんです。あなたが無事に出産できるように守ってくれるものです」

権藤宣子「これは日本のお守りです。あなたが無事に出産できるように守ってくれるものです」

砂子、ナジマの首に安産祈願のお守りをかけてあげる。ナジマ、お守りを見ながら、

ナジマ「オマモリ？」

砂子「そう、お守り」

ナジマ「オマモリ、ありがとう」

権藤宣子「ありがとう」

砂子「ありがとうって言いたいのはこっちの方です」

権藤宣子「ありがとうって言いたいのはこっちの方です」

砂子、ナジマを抱き締めて、

砂子「引き受けてくれてありがとう」

アヌーパの声「ママ！」

突然、ナジマと砂子の間に割り込むように響く声。ナジマ、その声の方を振り向くと、娘のアヌーパと夫のマルパニが立っている。

ナジマ「アヌーパ！」  
アヌーパ「ママ！」

アヌーパ、駆け出す。まるで、砂子に母親を渡さないといつた勢いで、ナジマを抱きしめる。

砂子「誰ですか？あの子」

権藤宣子「ナジマの娘ですわね」

マルパニ「ナジマ！」

首にカメラをぶら下げた夫のマルパニもナジマの元へ。

権藤宣子「家族はクリニックと一緒に暮らすわけにはいかないのですね。ああやって時々訪ねてくるんです」

砂子「そうなんですわ」

砂子の視線の先、幸せそうなナジマとアヌーパ。アヌーパ、ナジマの膨らんだお腹を優しく撫でる。

マルパニ「あのチーニーがお前のクライアント？」

ナジマ「チーニーじゃなくてジャーパーニー」

マルパニ「見分けつかねえなあ」

アヌーパ「誰なの？あのおばちゃん」

マルパニ「ジャーパーンからママに会いに来た人だよ」

アヌーパ、砂子を睨む。砂子、アヌーパを見つめる。デサイ、登場して、

デサイ「ミセス芦田、ミセス芦田」

砂子「あ、はい。すみません」

デサイ「代理母の経過をご報告します。こちらへどうぞ」

デサイ、砂子、潤一、権藤宣子、事務所へ入っていく。

アヌーパ「ママはあのおばちゃんに赤ちゃんあげちゃうの？」

マルパニ「アヌーパ。赤ちゃんはねママの赤ちゃんじゃないんだよ。

あのおばちゃんから預かってるだけなの」

アヌーパ「じゃああの人産めばいいじゃん。なんでママのお腹に入ってるの？」

マルパニ「ママの方が産むの得意なんだよ。だから代わりに産んであげるの。ママはアヌーパみたいな可愛い子バンバン産んじゃう

んだ。すごいんだぜ、ママ」

アヌーパ「すごいんだママ？」

マルパニ「すごいんだよ。それにスクーターも電子レンジもカメラ

も全部ママがこの仕事で買ってくれたんだぞ」

アヌーパ「ママ、アヌーパも大きくなったらママと同じ仕事したい！」

マルパニ「しろしろ！」

ナジマ「ちょっと」

マルパニ「いいんだよ、お前本当にすげえんだから。すげえんだから」

アヌーパ「すげえんだから」

ナジマ「本当にすげえい？」

マルパニ「すげえよお前。みんなが見に来るよ、新しいピカピカのスクーター。触りに来るんだよ、このカメラ」

ナジマ「よかった」



アヌーパ「ママ、（内緒話で）アヌーパ、本当は赤ちゃんあげたくないよ」

ナジマ「え？」

アヌーパ「でもすげえ仕事だもんね。あげたくないなんてもう言わない」

ナジマ「そうね」

代理母たちの部屋、暗くなる。デサイ、砂子、潤一、登場。

## 第29場 デサイの診察室

デサイ「どうぞ。お座りください。経過は順調です。代理母、胎児ともに問題ありません。このまま行けば五ヶ月後には無事出産できると思います。ミセス芦田の方では何か」

砂子「……」

潤一「砂子」

砂子「実は今日まで言えずにいたことがあったんですが」

デサイ「何でしょう？」

砂子「帝王切開にしていたみたいです」

デサイ「え？」

砂子「まだ早い話なんですけど」

潤一「どうしたんだよ？急に」

砂子「別に急じゃないの。前から考えていたことなの」

潤一「でも俺は聞いてないぞ？」

砂子「今、言ったでしょ？」

潤一「お前なあ」

砂子「どうでしょうか？」

デサイ「代理母が承諾してくれば。ただ、その分費用はかかりま

すが」

砂子「それは大丈夫です」

デサイ「わかりました、ナジマに話しておきます」

砂子「お願いします」

デサイ「出産時の赤ちゃんへの圧迫を防ぐためとちゃんと説明すれば多分OKするでしょう」

砂子「そうじゃないんです」

デサイ「そうじゃない？」

砂子「産道を通って欲しくないんです。彼女にも、ナジマにも悪い

と思って。自分の赤ちゃんでもないのに自分の産道を通して生ま

れて来るのは」

デサイ「なるほど」

砂子「ワガママですかね？」

デサイ「きっと彼女もわかってくれますよ」

ナジマの声「帝王切開？」

第30場 デサイの診察室

ナジマ、マルパニ、登場。砂子と潤一、退場。

デサイ「そうよ。前に説明したでしょ？お腹を切って赤ちゃんを直

接取り出すの」

ナジマ「はい。わかっています」

デサイ「じゃあ、いいわね？」

ナジマ「い、い」

デサイ「いいわね？」

ナジマ「はい。わかっています」

デサイ「じゃあ、いいわね？」

ナジマ「赤ちゃんへの負担を軽くするためですか？」

デサイ「クライアントは、そういう自分勝手の気持ちじゃないのよ。」

産道を通って欲しくないんだって。あなたのために。あなたの赤ちゃんでもないのに、あなたの産道を通って出て来たらやっぱり嫌でしょ？」

ナジマ「私、気にしないんだけどなあ、そんなこと」

デサイ「クライアントは気にしてるのよ」

ナジマ「、、」

マルパニ「別に報酬もらえるんですよ？その分の」

デサイ「もちろん。帝王切開は3万ルピーの追加報酬よ」

ナジマ「大丈夫です。帝王切開、やります」

デサイ「よかった。断るんじゃないかって思ってた」

ナジマ「そんなワガママ言いませんよ」

デサイ「別にワガママにはならないわ。あなたの身体のことなんだからあなたが決めていいのよ」

ナジマ、マルパニを見る。

ナジマ「はい、決めました。帝王切開をお願いします」

デサイ「よろしくね」

ナジマ「マダム、ありがとうございます。私、マダムのおかげで稼げるようになった。それも家族で一番の稼ぎ頭。夫の私を見る目も変わったし、文字だって読めるようになったし」

デサイ「一人でも多くのインドの女性に自立と誇りを与えること。

それが私の夢なの」

ナジマ「え？そうなんですか？」

デサイ「そうよ。言っただけだった？」

ナジマ「素敵な夢」

デサイ「ありがとう」

マルパニ「また仕事もらえますか？」

デサイ「え？」

マルパニ「この子を産んだ次も。借金を返したら次は家を買いたいんです」

デサイ「もちろんよ。あなたたちさえよければ」

デサイとマルパニ、退場。

第31場 デサイ・サロガシー・クリニック・代理母ハウス

ナジマが部屋へ入ってくると、ルビナ、身を起こす。

ルビナ「なんだったの？さっき」

ナジマ「え？」

ルビナ「クライアントから何か頼まれたんでしょ？」

ナジマ「帝王切開にしてくれて。産道を通して欲しくないんだって。この子は自分の子で私の子じゃないから」

ルビナ「じゃああんたお腹切るんだ」

ナジマ「うん」

ルビナ「まあいろいろ都合いいからね」

ナジマ「都合？」

ルビナ「帝王切開なら日にち決められるでしょ？クライアントは仕

事休みやすいらしいよ」

ナジマ「立ち会うための休み？」

ルビナ「そう、事前にわかるから」

ナジマ「じゃあ砂子は立ち会ってくれるんだね？」

ルビナ「そうじゃない、きつと」

ナジマ「砂子の夢は赤ちゃんに会うことなの。あの人言ったの。赤ちゃんに会いたいわって。私たちの遺伝子を持った、あなたの赤

やんって。私たちの夢は重なり合ってるの」  
ルビナ「ナジマ」

ナジマ「そういえば、昨日も変な夢見た」

ルビナ「何？また精子の夢？」

ナジマ「違うよ。孔雀の夢」

ルビナ「孔雀？」

ナジマ「綺麗な孔雀が綿花畑を歩いてるの」

ルビナ「へえ」

ナジマ「孔雀は綿花を食べ始める。最初はゆっくりと、段々凄い勢いで、貪るように食べ尽くしていくの。あっちもこっちも全部。

食べるたびにどんどん身体が膨らんでいって。そしたら突然、バって羽根を大きく開いたの。美しかった。思わず見とれちゃった。

もう、村のみんなもその羽根の輝きの虜になっちゃって、これまでに以上に一生懸命、土を耕し、種を蒔き、花を咲かせて、孔雀に食べてもらうの。食べるたびに孔雀の羽根はその輝きを増すの」

ルビナ「……」

ナジマ「私もあんな風に綺麗になりたい。美しくなりたい。そう思っ  
って羽根に手を伸ばしたのそしたら……、触る前に飛んで行っちゃ  
った」

ルビナ「……」

ナジマ「ねえ、ルビナも孔雀になりたい？」

ルビナ「さあ、どうだろう？おやすみ」

ナジマ「おやすみ」

ナジマ、毛布に潜り込んで寝る。ルビナも眠る。ホテルに向  
かって歩いている砂子と潤一、登場。

潤一、砂子を追いかけながら、

潤一「どういうつもりだよ？」

砂子「何が？」

潤一「帝王切開なんて、」

砂子「言ったでしょ？産道を通して欲しくないって」

潤一「俺は反対だよ。それだけの理由で代理母にお腹を切らせるなんて」

砂子「それだけの理由？」

潤一「産むだけが親じゃないだろ？、何に嫉妬してるんだよ？」

砂子「別に嫉妬なんかしてない」

潤一「してるよ。ナジマの子供を見た時から君は変になってる」

砂子「、、、」

那智「ナマステー」

柳生「ナマステー」

那智と柳生、登場。

砂子「那智？」

那智「驚いた？街で見かけたから追っかけて来ちゃった。(潤一に)

覚えてます？砦那智です」

潤一「もちろんです」

那智「嬉しい。良かった。えっとこちらは会社の先輩の柳生さん」

柳生「柳生です。はじめまして」

潤一「はじめまして芦田潤一です」

砂子「あんたこんなところで何やってるのよ？」

那智「仕事よ。今追っかけてるのがインドの話なの。あんたこそ何

やっつてんのよ?」

砂子「何って、ゝ、観光よ、ねえ」

潤一「そう、観光です」

那智「そう」

砂子「そうよ」

那智「ねえ、どこに泊まってるの?」

砂子「そのホテルだけど」

那智「今、私たちがちょうどビール買ったところなの。せつかくだから一緒に飲まない?」

砂子「もしかして私たちの部屋で?」

那智「私たちのホテル、こっから結構遠いのよ」

砂子「でも」

那智「いいじゃん。いいじゃん。せつかくインドで会ったんだよ、ね?飲もうよ」

砂子「まあ、うん(潤一を見る)」

潤一「飲みましよう」

その場で全員座る。すると、そこはホテルの一室に変わり、

砂子・那智・潤一・柳生「ははははは!」

那智「じゃあ潤一さんは毎日砂子の足にキスしてるの?」

潤一「もういいじゃないですかその話は」

那智「超変態なんですけど(砂子に)あなたは平気なの?それ」

砂子「慣れちゃったかな、もう?」

那智「変態夫婦」

柳生「それ会社の人に言っちゃダメですからね」

潤一「言えませんが、そんなこと」

那智「ゝ、でも羨ましいな、幸せそうな新婚生活送ってて。私なん

て仕事しかないから」

砂子「那智」

潤一「こっちでは何の取材をされてるんですか？」

那智「内緒です」

潤一「何ですか？それ？教えてくださいよ」

那智「どうしようかな？」

柳生「言いなよ。ケチ臭い」

那智「私たちね、今、ドキュメンタリーの番組の撮影をしているの。

インドにおける代理出産をテーマにした」

砂子・潤一「え？」

那智「どうしたの？」

砂子「いやなんでもない。代理出産か、へえ、、、前に言ってた企画

がそれ？」

那智「そう。あれから上のOKが出るまで結構かかってさ、最近や

っとこっちでの撮影に入れたってわけ」

柳生「ところが肝心の日本人クライアント夫婦に接触する手段がな

くて、立ち往生してるんですよ」

那智「どうしたら接触できると思う？」

潤一「、、、こっちに來てるんですか？」

那智「今週末來るってクリニックの先生がポツって漏らしたのよ」

砂子「名前とかはわかってない？」

柳生「それがわかれば簡単なんすよ。ホテルに片っ端から電話して

マルマルさんいませんか？って聞けばいいだけなんですから」

砂子「そうですか」

那智「インタビュー撮らしてもらえないかなあ。その夫婦の」

砂子「無理だと思うよ」

那智「え？」

砂子「だってそんなプライベート過ぎる話、ペラペラ話したがる



人いる？無理よ」

柳生「いや無理じゃない。俺達絶対ゲットしますよ。その夫婦が何を思つて金で赤ちゃんを買つという選択肢を選んだのか。どうすか？視聴者が飛びつくネタでしょ？」

砂子「金で赤ちゃんを買うつて」

柳生「実際にくらなら買います？」

砂子「買いませんよ」

柳生「例えばですよ。仮に。インドでの相場は百万だ。ちよつと高い。でも俺は五十万なら考えちゃうね」

那智「柳生さんつて子供欲しかったんですか？」

柳生「欲しいよ。独身だし。老後が心配だし」

那智「何すか？それ」

柳生「実際買えるらしいんすよ。卵子は提供してもらつて俺の精子と人工授精して。それでも百万ちよつと」

那智「柳生さん、デリカシーないですよ」

柳生「俺はどんどん買えばいいと思う。どうしても子供が欲しい人がいて、どうしても家が欲しい人がいる。正当な取り引きだよ」

潤一「家？」

柳生「あ、そうか。知らないよね？代理母への報酬百万はインドでは2千万以上の価値があるんです。つまり家が買えちゃうの」

潤一「そうなんですか？」

柳生「じゃなきゃ他人の子供を産む女いないでしょ？」

砂子「います」

潤一「砂子」

砂子「(潤一に)私、別に産んでもいいと思つてる。(那智に)もちろん、自分の子供を産んだ後にだけど」

柳生「他人の子供ですよ？」

砂子「そうですよ」

柳生「いくらで？」

砂子「ただで。ポランティアで」

柳生「嘘ですよ」

砂子「嘘じゃないですよ」

柳生「いやいや2千万円ならまだしも。タダはないな」

砂子「あります。女なら女同士なら。子を持ってない辛さがどんなか

想像できるもの」

那智「どうしたの？砂子、変よ、さつきから」

砂子「別に変じゃないわ」

那智「砂子、インドに何しに来たの？」

砂子「さつき言ったでしょ？観光だって」

那智「代理母に会いにきたんじゃないよね？」

砂子「(怒って) 違つよー！」

那智「なんで怒るの？」

砂子「怒ってないわよ」

那智「代理母に会いに来たんでしょ？」

柳生「え？どついうこと？、、、芦田さんが依頼人つてこと？」

那智「インタビューさせて」

柳生「まじかよ？」

那智「私も砂子と同じ年だから、子供を持つか持たないか考えない

日はない。多くの女性が将来の妊娠のことで悩んでる。その中に

はやがて不妊で苦しむようになる人もたくさんいる。だから砂子

の今の気持ちを伝えたいの、その人たちに」

砂子「断るわ」

那智「お願い、砂子」

砂子「代理出産を特別なことにしないで。私、親になりたいだけな

の。普通のことなの。子供を授かって育てる。何万年ってみんな

が繰り返してきたことをやりただけ」

那智「お金払って自分の子供を産ませるのは普通のこと？」

砂子「その人が言ったでしょ？ 正当な取り引きだって」

那智「わかってるでしょ？ 日本で他人の子供を百万円で産むは人い  
ない……」

砂子「インドにいるならいいの……」

那智「いい？ 本当に？ 日本にいないのにインドにいるのはいいこと  
なの？」

砂子「ねえ、自分の子供が欲しいって思うのはそんなにいけないこ  
と……」

那智「インドのお金持ちが、礁子ちゃんに2千万円の大金を用意し  
たらどう思う？ 自分たちの子供を産ませるために……どう思う？」

砂子「……」

那智「搾取になってなければいいの」

砂子「搾取？」

那智「私たちの悩みを、他の国の貧困につけこんで解決してなけれ  
ばいいの。でもこれは」

砂子「私だっってお腹を痛めて産みたいよ。でもないのお腹。なくな  
っちゃったの」

那智「……」

砂子「那智、ナジマは私の夢を叶えてくれるって言った。その言葉  
は絶対に嘘じゃないよ。那智のドキュメンタリーは私の夢を叶え  
てくれる？ お腹の傷を癒してくれる？ からっぽになったこのお腹  
をもう子宮のないお腹を本当に癒してくれる？」

那智「……」

砂子「いいじゃない。搾取でも。これは希望がある搾取よ。誰も不  
幸せにはならない搾取よ…… 出てって、この部屋から」

柳生と那智、立ち上がり、出て行くこうとするが、

那智「前に聞いたよね？子供のいない幸せってあると思うかって。子供がいなきゃ幸せになれないなんて幻想だ、そう答えてなかった？砂子から見たらパートナーも子供もない私の人生は不幸せに見えるってことよね？」

砂子「、、、」

那智「普通って何？普通の幸せって何？子供がいる人生だけがそんなの？その普通が欲しいから普通じゃない方法に手を出すの？」

砂子「、、、」

那智「現代でも妊娠出産は命を失うリスクがある。インドではまだ500人に1人が妊娠と出産で死亡している」

砂子「、、、」

那智「それに見て見ない振りをしてない？十月十日自分のお腹で育てた赤ちゃん。その赤ちゃんを彼女たちがどんな想いで手放すのか？同じ女なら想像できるでしょ？」

那智と柳生、部屋から出て行くこととする。

砂子「私も五週間だけは母親だった。子宮癌を手術で取る前。妊娠してた。まだ胎動は無かったけど感じたの。ここにあの子がいるって」

那智「、、、」

砂子「もう一度会いたい。あの子に」

那智、退場。続いて、柳生、退場。

砂子「潤一」

潤一「うん」

砂子「私たちは搾取してるの？」

潤一「、、、」

砂子「、、、」

潤一「この間さ、変なこと考えちゃった俺」

砂子「、、、」

潤一「もしもね、日本人が絶滅して俺と砂子が最後の二人になったらって。その時は誰も俺たちの代理出産を反対しないんじゃないかって」

砂子「、、、」

潤一「馬鹿だよな俺、そんなこと考えて」

砂子と潤一の部屋、暗くなる。

### 第33場 ナジマの子宮の部屋

クジャクとスキヤキ、登場。

クジャク「起きた？」

スキヤキ「あれ？また寝てた？」

クジャク「ずっと寝てたよ。もう起きないかと思った」

クジャク、頭を震わせながらスクワットをしている。

スキヤキ「何してるの？」

クジャク「頭を使ってるの」

スキヤキ「何のために？」

クジャク「外に出る準備」

スキヤキ「外？」

クジャク「外」

スキヤキ「君、女の子だろう？はしたないよ。やめとけよ」

クジャク「ねえ、あなただつて女の子よ、もう」

スキヤキ「え？、女になるの？俺」

クジャク「そう、私、女になるみたい」

スキヤキ「このままでいようよ。温かいし、やわらかいし、こ」

クジャク「私は出たいの。外の景色を見てみたい」

スキヤキ「危ないんじゃないか外は」

クジャク「見てみないとそれもわからないよ」

クジャク、頭を震わせながらスクワットをする。

スキヤキ「もしもさあ外の世界がひどい世界だつたらどうするの？」

クジャク「そのひどい世界を見てみたい。どんな風にひどいのか、

自分の目で確かめたい」

スキヤキ「真っ暗で何も見えない世界だつたら？外に出た瞬間、目

は開かず、耳も聞こえなかったら？」

クジャク「でも何かを感じる」とはできると思つた」

スキヤキ「出ちゃつたら戻れないよきつと」

クジャク「私だつてここは好きよ。壁の色が好き。手を伸ばせばす

ぐ飲めるジュースが好き。いつも響いているドクツドクツドクツ

っていう太鼓の音が好き。時々、聞こえてくる、」

ナジマの「Um hi ho」が聞こえてくる。

クジャク「この歌が好き」

スキヤキ「なんて歌ってるの？」

クジャク「わからない」

スキヤキ「誰が歌ってるの？」

クジヤク「わからない。でも外に出れば会える気がするの。この歌を歌ってる人に」

スキヤキ「本当に会える？」

クジヤク「会えるよ、きっと」

クジヤク・スキヤキ「あっ！」

突然、地震が起きたかのように二人の足元が揺れる。スキヤキ、びびる。クジヤクは怖い気持ちを必死で抑える。

スキヤキ「揺れてる」

クジヤク「大丈夫だから」

スキヤキ「部屋全体が動いてるみたい」

クジヤク「みたいじゃなくて動いてる、、、目を瞑って」

クジヤクとスキヤキ、スツスツハツハツと長距離を走る時のような呼吸法になる。

クジヤクとスキヤキ「スツスツハツハツスツスツハツハツ」

目を合わせるクジヤクとスキヤキ。

クジヤク「このリズム」

スキヤキ「なんだよ？」

クジヤク「走ってる？」

スキヤキ「何が？」

クジヤク「この部屋が走ってる————！」

9ヶ月の大きなお腹に手を添えながら、スローモーションで走っているナジマ。第1場のスキヤキが障害を乗り越えていくシーンのイメージが繰り返される。砂子と、権藤宣子が照らされる。

権藤宣子「(電話で) 芦田さん、大変です」

砂子「(電話で) どうしたんですか?こんなに朝早く」

権藤宣子「(電話で) 芦田さんの代理母がいません。ナジマが逃げ出しましたんです」

砂子「(電話で) え?」

権藤宣子「(電話で) 詳しいことは私もわからないんですが、ナジマが逃げ出したんです」

走り続けるナジマ。その周りで彼女を探し回る声がある。

インディラ「ナジマー!!」

インディラ、舞台上を叫びながら、走り去っていく。

砂子「まだ見つからないんですか?」

権藤宣子「必死に探してはいるんですが」

インディラ「ナジマー!!」

インディラ、舞台上を叫びながら、走り去っていく。

砂子「まだ見つからないんですか?」

権藤宣子「必ず見つけますから」

インディラ「ナジマー!!」



インディラ、舞台上を叫びながら、走り去っていく。走り続けるナジマ。

権藤宣子「彼女が見つかりました！」

砂子「え？」

権藤宣子「カラング村です。彼女はカラング村にいます！」

走り疲れたナジマ、息を整えながら、座る。

ナジマ「（自分のお腹に）ごめんね。大事な時期に不安にさせて。お

母さん、もう走らないから。大丈夫だから」

デサイ「ナジマ」

ナジマ、振り向くとそこに、デサイがいる。その後ろには、砂子が立っている。

第34場 カラング村

砂子「なんで逃げたの？」

デサイ「なんで逃げたの？」

ナジマ「別に逃げてないんです。帰ろうと思っただけで」

デサイ「逃げてない。帰ろうと思ったただけだって」

砂子「その子を連れて？」

デサイ「その子を連れて？」

ナジマ「この子に見せたかったんです。私の故郷を」

デサイ「故郷を見せたかったって」

砂子「その子は私の子よ。カラング村はこの子の故郷じゃない」

デサイ「その子は私の子よ。カランギ村はこの子の故郷じゃない」  
ナジマ「(笑顔で)……」

デサイ「クリニックへ戻ろう」

デサイ、ナジマの手を握ろうとするが、それをはねのける。

デサイ「ナジマ」

ナジマ「黄色い肌をして生まれてくる。私とは外見がきつと違つ。

私には幸せにできない」

デサイ「わかってるじゃない」

ナジマ「(笑顔で)……」

砂子「何て言ったんですか？」

デサイ「自分は母親じゃないって」

ナジマ「胸が張っておっぱいがキユーっとしてくる。お腹の中で」  
の子のしゃっくりの音が聞こえる。(笑って)へへ、でも私、母親

じゃない……」

デサイ「(怒鳴って)あなたは母親よ……」

ナジマ「……」

砂子「何て言ったんですか？」

デサイ「(ナジマに)これで満足?じゃあ仕事戻ろう。あなたは(お  
腹を差して)これで稼いでるの。わかる?稼いでるの」

ナジマ「わかってるんです」

砂子「あのう、何て言ったんですか？」

デサイ「ちゃんと仕事に戻りますって。ね、ナジマ」

ナジマ「(笑って)……めんなさい、本当のお母さん」

ナジマ、生気が無くなったかのように無機的に歩いて、クリ  
ニックに戻っていく。

砂子「何て言ったんですか？」

デサイ「……」

砂子「二人で何て言ってたんですか？」

デサイ「大丈夫ですよ。彼女はちゃんとクリニックに戻りますから」

デサイ、退場。ナジマ、ベッドの上で仰向けになる。しばらく天井を見ている。そして空に手を伸ばすが、やがてやめてしまう。そして、ナジマをずっと見つめている砂子。

第35場 デサイ・サロガシー・クリニック

砂子「一ヶ月後、ナジマは私たちの赤ちゃんを産んだ。女の子だった」

ナジマ「ウー、アー。ウー、アー。ウウー、アアー」

ナジマの呼吸音は怖ろしいまでに冷たい。無表情。しかし、目からは涙だけがひたすら流れている。クジャク、砂子とナジマの間のちようど中心に現れる。クジャク、赤ちゃんのように泣き出す。潤一、登場。

潤一「産まれた！」

クジャク、泣き続ける。

砂子・ナジマ「見て。私の赤ちゃん」

砂子「女の子よ」

潤一「目が君にそっくりだ」

砂子「口はあなたに似てない？」

潤一「鼻が俺で、口は君だよ」

砂子「見て、笑ったよ」

潤一「おおお」

砂子・ナジマ「抱いてもいいんですか？」

デサイ「どうぞ」

それぞれに、赤ちゃんを抱く仕草をする砂子とナジマ。二人に抱かれると、泣き止むクジャク。

砂子「ナジマ、ありが(とう)」

ナジマ、その場から音もなく去っていく。ナジマが寝ていたベッドには、もう誰もいない。

砂子「子供の顔も見ずに、ナジマはいつの間にか私たちの前から消えていた。いや、もしかしたら、消えていたのは私たちだ。ナジマから赤ん坊を引き離し、二度と目を合わせることなく。私は産休を取りながら少しずつ日常に戻っていく。日々の生活は少しだけしか変わらない。朝起きて、コーヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、ベイビーシッターがやってくる。朝起きて、コーヒーを入れ、顔を洗い、朝食を取り、歯を磨き、ベ……」

赤ちゃんが突然、泣き始める。その声が響いて、、、暗転。終わり。